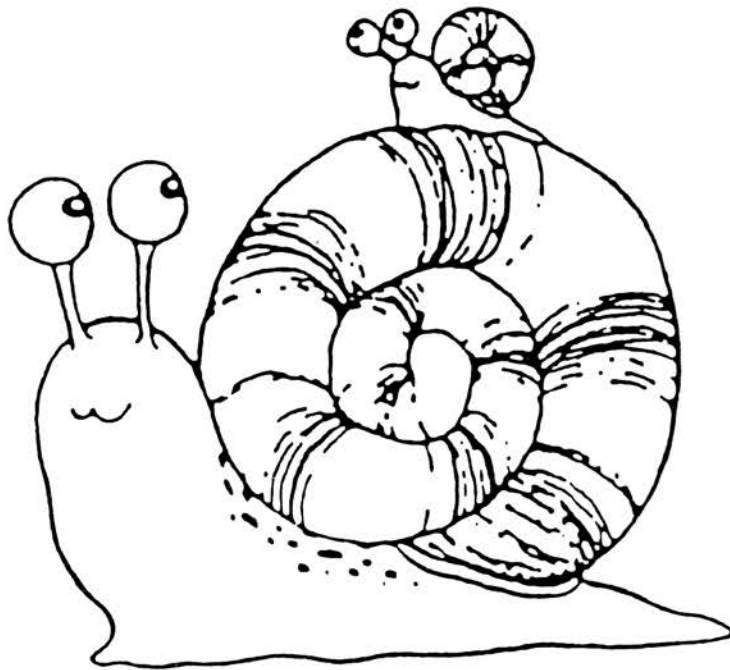


第31回全国バス学習研究大会

ともに学び、ともに育つ、総合的な学習の展開

—— 個を育てるバス学習・協同学習 ——



Buzz

期 日	平成12年1月27日（木）
会 場	東京都青梅市立第一中学校
主 催	全国バス学習研究会 東京都バス学習研究会

はじめに

第31回全国バズ学習研究大会会長
東京都豊島区立道和中学校長

木村幸夫

第31回全国バズ学習研究大会が、東京都青梅市立第一中学校で開催されることを大変うれしく思います。東京での開催は、第28回文京区立第六中学校で開催されて以来の3年ぶり3回目になります。

本日を迎えるまで、会場を提供くださり、平常授業の参観をご配慮くださいました青梅第一中学校の先生方に深く感謝いたします。また、会場提供にご配慮いただきました青梅市教育委員会にお礼申し上げます。

さて、現在の子どもたちを見てみると、受験戦争の過熱化、いじめや不登校の問題、学校外の社会的体験の不足など、豊かな人間性をはぐくむべき時期の教育に様々な課題が生じています。そのため、思いやりに欠けているとか、自己中心のであるとか、集団での生活行動ができないとか、耐性がなくすぐに切れるとかいわれています。また、話し合い活動の不足からか、親や先生、友人との人間関係が希薄になって来ているともいわれています。

このような現象から、今回のテーマを『ともに学び、ともに育つ、総合的な学習の展開』とし、五つの分科会で研修を深めることにしました。

学校という集団生活の中で、人間関係づくりの能力をいかにはぐくむか、これが学校教育の目的の一つでもあります。一日の生活の中で、子どもたち同士が話し合う、子どもと教師が話し合う、教師同士が話し合う中で、お互いが信頼しあい協同することによって学校教育が目的とする基礎学力と人間性の育成がなされていくものと考えます。

本大会を通して、バズ学習が理解され、参加された先生方の指導技術が向上し、これからの指導に少しでも役に立つようであれば幸いです。

参会の皆様、どうぞ全国各地の提案者と一緒にご討議なされ、実りある大会にさせていただきたいと願っています。

第31回全国バズ学習研究大会開催に際して

全国バズ学習研究会研究者代表

名古屋大学教育学部教授 梶田 正巳

このたび、第31回全国バズ学習研究大会が青梅市立第一中学校で開催されることになり、心から喜んでおります。東京都での開催は昭和62年(1987)年以来のことです。当時ご存命であったバズ学習の創始者塩田芳久先生は、東京でのバズ学習開催を本当にお喜びでした。望月和三郎先生のご努力によって実現したその大会は、バズ学習の考え方を大きくアピールする機会となりました。今回の大会も、当時の記憶を手繰れば感慨深いものがあります。開催をお引き受けいただいた高木校長先生をはじめ青梅第一中学校の先生方、また準備に多大なご努力をいただいた東京都バズ学習研究会の先生方、全国バズ学習研究会事務局の先生方には深く感謝申し上げます。

バズ学習という学習指導法、または学習指導論は、その名称が広く定着しているものの、十分な理解が進んでいるとは言い得ない状況があります。単なるグループ学習の一手法といった理解は、きわめて不十分なものです。バズ学習の理論の根底にある、学習指導における信頼に支えられた人間関係の重要さの指摘は、すべての教育場面で一貫させるべき原理といえます。

近年のさまざまな教育諸課題に対して、それを解決する最重要の観点がバズ学習に含まれています。総合的学習の時間などでめざす学力は、学校教育全体を同時に貫くものでなくてはなりません。バズ学習の唱える一貫性、統合性の観点は今の教育への接近に不可欠のものといえるでしょう。

なお、諸外国では「協同学習(cooperative learning:CL)」への関心が非常に高まってきました。最近、そのようすを紹介する訳書(ジョンソン他『学習の輪—アメリカの協同学習入門』二瓶社刊 1998)も出版されました。その内容は、日本と合衆国という文化や制度をこえて共通する教育の原理として、いかに協同が有効かということをはっきりと理解させてくれるものとなっています。合衆国などでは協同学習の理解は教師教育では欠かすことのできないカリキュラムの内容のひとつとなっています。日本の教師教育でもそのような観点が前向きに受けとめられるようになったならば、学校の中身はよい方向に大きく変わることでしょう。

この研究大会は、バズ学習を一方的に普及させるためのものではありません。実践交流を通して、バズ学習の中から、現場の先生も、研究者も、参加した方々がそれぞれ実践課題、研究課題を解決し、新たなものを持ちかえるためのものだと考えます。活発な意見交換などを通して、互いに実りをもたらし合うことのできる機会となることを確信します。

(2000年1月3日)

全国バズ学習研究大会によせて

全国バズ学習研究会会長

愛知県春日井市立柏原小学校長 寺井正輝

平成8年11月に東京都文京区立第六中学校で第28回全国バズ大会を開催させていただいて以来、数年を経て学校を会場に全国大会が開催できたことを関係者のひとりとして大変喜んでいきます。

この間、第29回名古屋市の南山大学会場、第30回知多郡内海会場と「豊かな人間関係を基盤にした授業や学習の創造」をテーマに多くの皆様に支えられて、地道に実践と研究に取り組んでまいりました。そして、終わるときにはいつも「次会は、学校を会場に先生方と膝つきあわせて」が決まり文句でした。その私どもの願いが、青梅市立第一中学校の高木清文校長先生はじめ、関係諸先生方のご努力に支えられてここにかなえることができました。心より厚くお礼申し上げます。誠にありがとうございます。

21世紀を展望した教育改革の舞台は、いよいよ2000年を迎え学校現場に委ねられました。とりわけ、これからの学校教育には「生きる力」の育成が重要であるとされています。それは、極めて変化の激しい社会に対応するために「他人と協調しつつ、自立した社会生活を実現する実践力」や「課題を見つけ、考え、自ら問題を解決していく能力」や「自然や美しいものに感動する感性の豊かさ」を身につけさせることであります。

これらの観点は、「子ども一人一人の考えを重視し、お互いの良さを認め合い、高め合いながら自己実現を図る子どもの育成」を目指してきたバズ学習の実践研究と符合するものであり、私どもの実践を一層確信するものでもあります。

今回は、総合学習の視点も取り入れたバズ学習研究大会ですが、今後の実践研究に向けて積極的な提案や貴重な資料を多数いただいたことに感激しています。

どうぞ、ご参会の皆様も全国各地からの提案者の実践をもとに、熱っぽい討議を重ね、21世紀の教育の推進者として力量を一層高めていこうではありませんか。

最後になりましたが、会員のご協力と役員をはじめ事務局の皆様や青梅市立第一中学校の関係者の皆様のご支援に心より厚くお礼申し上げます。

目次

はじめに

全国バズ学習研究大会開催に際して

全国バズ学習研究大会によせて

<校内研修紹介>

豊かな人間性をはぐくむ教育をめざして

—地域社会との連携を求めて 青梅市立第一中学校研究部…… 8

<基調提案>

バズ学習と総合的学習の展開

中京大学 杉江修治…… 16

<分科会>

第1分科会 1A教室

創意を生かしたグループでのライティング活動の工夫

杉並区立松ノ木中学校 廣澤一恵…… 20

『バズ学習』を生かした学級集団の育成 土岐市立泉中学校 山内芳彦…… 24

学校態勢で取り組んだ環境教育—そこから中学校における

総合的な学習の在り方を考える 春日井市立南城中学校 堤 泰喜…… 30

第2分科会 1B教室

算数科における学習の改善—子どもとつくる学習めざして

練馬区立光が丘第八小学校 荒木正志…… 38

主体的思考力を高める授業の創造—ものづくりの学習を通して

春日井市立味美中学校 原田宗敏…… 42

個々の生徒の発想を生かした授業展開の工夫

杉並区立東田中学校 下斗米八穂…… 57

第3分科会 1C教室

- ともだちとの関わりを深めよう 杉並区立四宮小学校 望月保美…… 66
- バズ学習を生かした生徒指導
- ー授業形態等の工夫 尼崎市立大庄東中学校 前瀧康彦…… 70
- 生徒指導に生かすブリーフカウンセリング
- ー解決志向アプローチを中心に 松阪大学 宇田 光…… 76

第4分科会 1D教室

- 一人一人の活動意欲を高める活動の工夫 杉並区立泉南中学校 惣田修一…… 80
- 磨き合う生産的な対人関係処理能力について 創価大学 関田一彦…… 82

第5分科会 1E教室

- 3年間の保育体験から
- 青梅市社会福祉法人かすみ台福祉会かすみ台第2保育園 野寄淳子…… 88
- 地域との連携について 杉並区立泉南中学校 石上和宏…… 92

<記念講演>

「こころを育てる園芸活動」

園芸家 柳 宗民先生…… 96

<寄稿>

バズ学習の原理 中京大学 杉江修治……100

第31回全国バズ学習研究大会役員一覧……104

校内研修紹介

豊かな人間性をはぐくむ教育をめざして

ー地域社会との連携を求めて

青梅市立第一中学校研究部

基調提案

バズ学習と総合的学習の展開

中京大学 杉江修治

豊かな人間性をはぐくむ教育をめざして

— 地域社会との連携を求めて —

青梅市立第一中学校 研究部

I 主題設定の理由

かつて臨教審は「学校教育活動を社会に開かれたものにするために、児童生徒に対し、勤労体験やボランティア活動などの実践的活動を拡充、推進する必要がある」と答申した。いうまでもなく自らの生き方・在り方を追及しながら他者との関係、広く社会に貢献する心と体験活動の助長を強調したわけである。

現在の中学生の生活は、学校・家庭・塾等を中心としたものであり、交友範囲は気の合う友達同士に限定されていることが多い。いずれにしても、異年齢や社会とのかかわりが極めて希薄なまま成長してきている。このことは主体性や自主性の伸長、また社会性等をはぐくむうえで看過できないことである。

生涯学習社会を迎えた今日、生徒が増大する自由時間を主体的・創造的に活用し、活動を展開できるような精神や態度を育成する取り組みが、学校・家庭・地域などさまざまな分野に今、まさに求められている。

また、家庭にせよ他人にせよ、広い意味での「隣人」の暮らしに手を貸すことのできる生き方が今後、ますます大切になってくる。

変化が激しいこれからの社会を主体的に生きていく子どもの育成を図るためには、従来の教科指導の枠の中だけで対応するのでは不十分である。そこで、指導内容や指導時間を弾力的にとらえ、子どもたちの興味、関心を重視した教育活動を展開することが緊急の課題となっている。その解決のためには、地域社会の人材や教育力を積極的に学校に導入し、学校や地域社会の実態を生かした、体験を重視した教育活動の取り組みが不可欠である。

子どもが学習を進める中で、人との出会いの重要性に気付き、課題や疑問を発見したり、解決の糸口を探る過程を重視した教育活動の在り方の手掛かりを得ようと主題を設定した。

II 研究のねらい

青梅市教育委員会は、「地域社会に根ざした教育」を学校教育の指導の重点の一つとし、その中で、次の4点を重点として掲げている。

- 1 地域の自然や文化および人材を生かした教育活動の充実を図る。

- 2 地域行事や奉仕活動への参加を通して、自然や文化などのかかわりについての理解を深めるとともに、郷土を愛する心情を培い地域社会の一員としての自覚を高める。
- 3 地域の実情を踏まえた環境に関する指導を充実する。
- 4 災害時における学校の役割に配慮して、学校施設の整備を計画的に推進する。

このことを踏まえ、本校では、社会の変化に対応できる人間性豊かで主体的・創造的な人間の育成を目指し、地域の人材・教育力を活用した様々な教育活動が行われている。しかし、それらの取り組みはまちまちであったので、「学校として系統だった指導の必要がある」と指摘されている。これは、それぞれの活動が地域社会や保護者に十分伝わっていないからであり、指導の重点からみるとますますの実践・工夫が必要である。

そこで、これまでの本校における地域社会との連携の取り組みをまとめ、実施計画、指導方法、生徒の変容などの情報を共有することにより今後の実践・工夫に役立てる。同時に、「ボランティアを考える日」のより一層の充実を進めるなかで、新たな外部機関との連携の在り方と人材の招聘の具現化を図ることをねらいとした。

Ⅲ 研究の経過

本校は、昭和62・63年度に文部省研究推進協力校・青梅市教育委員会研究協力校の指定を受けた。その際は、「21世紀をめざした学校教育の在り方」を研究主題とし、生徒の自主性・主体性の育成を図る教育実践について研究を深めた。

この研究において、生徒の自主性・主体性の育成を図るために次の四つの視点と、三つの基本理念を設定した。

1 自主性・主体性の育成を図る四つの視点

- ① 地域の教育力を生かす。
- ② 生徒の活動の場を設定する。
- ③ 校務分掌の充実を図る。
- ④ 教科指導の指導法の改善を図る。

2 計画の作成、実施にあたっての基本理念

- ① 1年生は、「教える」段階とする。
- ② 2年生は、「教えつつ任す」段階とする。
- ③ 3年生は、「任す」段階とする。

この姿勢は、研究期間だけに終わらず、現在も本校の教育実践の礎となっている。

この研究の中から、本校の特色ある取り組みである、「社会活動参加記録」、「教育モニター」、「テレホンサービス」が生まれ、現在まで続いている。

平成3年度には、2年後の学習指導要領の完全改訂に向けて、学校教育目標の改訂に取り組んだ。その際には、多くの学校で扱っていた知・徳・体・情・意という分析的な視点からでなく、次の三点から学校教育目標を設定することとした。

- 1 自分自身に関すること
- 2 他人や自然、崇高なものとのかかわりに関すること
- 3 集団や社会とのかかわりに関すること

具体的には、次のように改訂した。

青梅市立第一中学校 教育目標

国際性豊かなよりよい社会人をめざして

- 一、 自ら学ぼう
- 一、 感謝と思いやりの心をもとう
- 一、 理想の実現に努めよう

この目標の具現化をめざすなかから、「独り暮らしの老人宅訪問」、「多摩川のクリーン活動」、「生徒会バザー」が生徒会主催の取り組みとして始まり、現在ではその一部がPTAとの連合活動に発展しつつある。

平成9・10年度には、東京都教育委員会「東京の教育21」研究推進校・青梅市教育委員会研究協力校の指定を受け、新たな研究に取り組んだ。研究主題を「豊かな人間性をはぐくむ教育を目指して」とし、副題を「ボランティア教育を中心に」と設定した。

生徒の豊かな人間性をはぐくむため、地域社会との連携を深め、地域の人材や教育力を学校に招き入れるとともに、学校教育目標の一つである「感謝と思いやりの心をもとう」に具体的に迫る教育活動を探り研究を深めた。この研究の柱となる取り組みとして、青梅市社会福祉協議会・青梅市ボランティアセンター及び市内各ボランティア団体の方々との連携による「ボランティアを考える日」を教育課程の中に位置付けることができた。また、ボランティア部の創設とともに部活動単位での地域ボランティア活動への参加も活発になってきた。平成11年2月26日(金)には、研究発表会で成果を公開し、地域社会との連携の中で生徒の豊かな人間性をはぐくむ教育の手掛かりをつかめたと考えている。

今年度は、これまでの取り組みを振り返り、2002年に全面実施される「総合的な学習の時間」実施への橋渡しとして、次の点についてまとめと研究を進めている。

1 校内研修会のなかで実態把握

(1) 生活指導主任会、養護教諭連絡協議会、進路指導主任会などの各種委員会の情報を共有することにより、生徒の実態を把握する。

(2) 本校が地域とどのような連携活動を実施してきたかをまとめ課題を検討する。

2 実践活動のなかで拡充を図る

(1) 新たな外部機関との連携と人材の招聘による「ボランティアを考える日」の実施

IV 研究の概要

1 生徒の実態

本校の学区は旧青梅町を中心とした市街地である。自治会や子供会の活動等、地域を主体とした活動が活発であり、連帯意識や絆が強く、生徒は地域の中ではぐくまれてきている。しかし、近年人口の流動により、一部ではあるが地域の結び付きが弱くなる傾向がある。

保護者は本校の卒業生が比較的多く、学校への信頼感はきわめて高い傾向にある。その一方、学校のきまりに対して批判的な保護者や、高校受験を極端に気にする傾向もみられる。

生徒は概ね素直であり、話を聞く態度がよく、清掃などの当番活動を熱心にする、行事に一体となって取り組むなどよい面がみられた。しかし、最近、当番活動への熱意が薄れたり、環境整備の意識が高められないという課題も出始めている。また、前述したような地域や保護者の変化の影響もあってか、人間関係を深めることが苦手な生徒、少しのことで興奮し安易に行動を起こす生徒、さらにいわゆる「指示待ち生徒」もかつてに比べて増えてきている。不登校の傾向にある生徒に関しても毎年どの学年にもみられ、その対応には試行錯誤を繰り返している。

このような実態の中で、生徒が体験を通して人との出会いに感動したり、他人を思いやる心など豊かな人間性をはぐくむことは、生徒自身のよさを伸ばし弱点を克服することにつながる。また、相手の立場を理解することができる人間、互いに協力しあうことのできる人間、ものを大切にすることができる人間の育成などにもつながり、進んで社会や他の人に貢献できる日本人、世代や国境を越えて信頼される日本人を育

成することができると思う。

2 地域との連携活動の実態

(1) 進路学習

① 職場訪問

働く人々の現場を直接見聞することにより、働くことの意義を理解し、さらに職業につく方法などを具体的に考えるとともに生き方を学ぶ。

② 上級学校説明会

公立高校、私立高校、職業高校、専門学校の先生方から、上級学校の実際の姿を直接聞くことにより、上級学校の理解を深め、日頃の学習や進路選択に向けての心がまえに役立てる。

(2) 部活動

① 老人介護施設、保育園等の施設をボランティア部や吹奏楽部などが訪問する。

② 地域の運動会やマラソン大会、文化祭等に運動部や吹奏楽部が参加する。

③ 外部指導員として地域の人材を招き入れる。

(3) P T A 活動

① 「多摩川一万人清掃運動」に親子で参加する。

(4) 生徒会活動

① 多摩川のクリーン活動を学期に一度実施する。

② 鉢植えの花を持参して、独り暮らしの老人宅を訪問する。

③ 校内でバザーを開催し、地域の方々に公開する。

(5) 地域活動

① 伝統芸能の継承者として青梅大祭（自治会連合会）のお囃子連に参加する。

② 地域の運動会やマラソン大会、文化祭等（自治会・青少対連合会）に参加する。

③ 地域の資源回収、清掃活動（自治会・子供会）に参加する。

(6) 教育委員会活動

① 青少年リーダー育成研修会に参加する。

② 国際理解講座に参加する。

③ ポップルト市との姉妹都市交流親善事業に参加する。

(7) ボランティア活動

① 福祉ふれあいソフトボール大会（ボランティアセンター）の手伝いをする。

- ② 風の子祭（社会教育部体育科）の手伝いをする。
- ③ 夏！体験ボランティア（ボランティアセンター）の各コースに参加する。
- ④ 青梅市福祉祭（ボランティアセンター）に参加する。
- ⑤ 春休みこどもまつり（青梅青年の家）に参加する。
- ⑥ 赤い羽等街頭募金活動に参加する。

(8) その他

- ② 選択教科で地域の方を講師に招きTT授業を実施する。
- ③ テレホンサービスを利用し、学校情報を地域に提供する。
- ④ 「教育モニター」を地域の方に依頼し、地域からの情報を収集する。
- ⑤ 運動会、作品展、合唱祭等の行事に地域の方を招待し交流を図る。
- ⑥ 消防署と連携し、防災・避難訓練を継続実施する。
- ⑦ 警察署と連携し、親子薬物乱用防止教室を実施する。
- ⑧ 選択授業で地域の寺社、資料館、博物館等を訪ね、地域の特色を学ぶ。

3 実践活動のなかで拡充を図る

平成11年度第2回「ボランティアを考える日」では、これまでの取り組みにさらなる工夫を重ね発展させたいと考えた。そのために、生徒の体験的学習の内容を福祉的体験だけでなく国際交流的体験にまで広げ、より豊かな人間性を高めたいと計画を立てた。具体的には、学校教育目標前文「国際性豊かなよりよい社会人をめざして」を踏まえ、外国籍の方や国際協力活動実践者の講話と実体験を通し、生徒の国際交流意識・態度の育成を図った。

市内外から約70名の講師を招き、20講座を設定し、楽しく学ぶことができた。第1回は「福祉・人権にかかわること」を重点とし、第2回は「国際交流にかかわること」を柱にしながら、更なる拡充を図ろうと思いを新たにしている。

V まとめと今後の課題

本校が地域と連携して行っている教育活動を並べてみるとかなりの数になることが分かった。それぞれの活動は特有の歴史をもち、生徒や保護者、地域に合わせて工夫されている。特に、地域清掃活動や福祉体験活動は様々な形態を取りながら、多くの生徒に取り組まれている貴重な体験学習となっている。自然と触れ合うことにより環境に対する優しさ、責任感を身に付けたり、初めての出会いで喜びや感動を覚える。他の人の立場や思いを理

解し、共感的な生き方に気付くなど教室では得られない貴重な社会体験となっている。

これらの体験学習をとおして、さまざまな社会生活の課題に触れ、社会にとって有益な役割と活動を担うことは自己理解を深め、自発性をはぐくみ、公共性を身に付けるためにたいへん有益である。世の中はすでに、少子高齢化の社会を迎え、お互いが思いやりの心をもって支えあう社会づくりが強く求められている。自然や他人を思いやる豊かな人間性をはぐくむために、学校教育の実践的内容として地域と連携した体験学習を位置付ける意味は大きい。また、体験学習は、そのものの教育的成果のほか、自分のよさに気付いたり、お互いに人としてのよさを学びあうことができる機会にもなり得る。

しかし、これらの体験学習は主に裁量の時間や学級活動の時間を利用して実施されていることが多い。あるいは、長期休業中や土曜休業日に実施している。「学校を開く」という観点から考えると、教育課程内の授業にこそ地域の教育力を招き入れ連携を図るべきである。どのような活動をいつ実施するかを慎重に検討し、教育課程に明確に位置付けし、年間計画に沿って実施しなければならない。

教育改革が進むなか、来年度からは学習指導要領の移行期間にはいる。選択教科の拡充、「総合的な学習の時間」の試行は、地域社会との連携による体験学習の導入を図るうえで絶好の機会といえる。また、「総合的な学習の時間」を効果的に実施するうえでの条件は、「教職員の指導体制ができていること」、「地域との連携ができていること」、「生徒に自ら学ぶ姿勢が身に付いていること」であるといわれている。学校は、後込みするのではなく、教職員一同が一丸となって積極的導入の推進役となるべきである。その際、地域との連携による体験学習の名のもとに、安易なイベント的取り組みにしまったり、遊び半分の活動にしまわないよう厳重に注意しなくてはならない。

そのためには、教育課程の編成と実施に関して、一人一人の教職員がその中心を担う気迫と心構えで責任を持たなければならない。また、地域の自治会、民生・児童委員会、青少年対策委員会、社会福祉協議会、国際交流協会、市民センターなどの公共施設等と相互の連絡を密接に取り、地域の情報交換の発信役となり学校を開いていかなければならない。さらに、研修活動を深め、意識改革を図るとともに、生徒の自ら学ぶ姿勢をはぐくむ授業改善に全力を尽くさなければならない。

これまでの取り組みを肯定的にとらえ、教育改革の意義と本質を見極め、確固とした教育活動を憶することなく地域社会に公開し、地域社会との連携を深めながら、生徒の豊かな人間性を高める教育を目指し、研究を続けている次第である。

VI 参考資料 (平成11年度第2回ボランティアを考える日 感想文)

TO ALL at 青梅市立第一中学校

Thank you for inviting me to participate in the 「ボランティアを考える日」. I thought the day was well organised and varied in content. I enjoyed talking to the students about international cooperation and volunteer activities. I hope they understood my Japanese !

One suggestion - it would have been nice to have a little more time for questions and discussion.

ほんとうに たのしかった、 ありがとう ございました。 外国籍講師

高木清文校長、岡崎美昭教頭はじめ皆様お疲れ様でした。

1時間という短い時間の中で十分な事ができず心残りですが、皆様が考えられたプログラムに参加できとてもうれしく思います。これからも、生徒のために素晴らしいプログラムを組んで下さい。

生徒といっしょに給食が食べたかったです。 国際協力プラザ講師

今回は初めての国際理解をテーマにしたボランティアを考える日だったけど、改めて日本は豊かで安全な国だと思った。いままでやってきたボランティアを考える日のテーマは「困っている人を助ける」だったけど、今回は「発展途上国を助ける」ということをテーマに勉強した。ボランティアは見返りを期待しない奉仕活動ということだけど、いくらボランティアの規模はちがってもボランティアの根本はちがっていないと思う。

今日、話を聞いているときに心に残った言葉がある。それは、ボランティアと差別意識は隣合わせになるということだった。つまり、ボランティアをするのは大いにいいことだが、ボランティアをしてやっていると弱い立場だと見下してボランティアをするのはいけないということだ。たしかにその通りだ。そういう気持ちがあるから差別したりけなしたりという行動が起こってしまうのだ。

どうせするなら、自分もその対象物もしくは人物もいい気持ちになれるようなボランティア活動をするのが望ましいと思う。だから、自分は心がけたい。常に相手の立場に立って物事を考え、相手を理解していくということを。海外青年協力隊編2生徒

バズ学習と総合的な学習の展開

中京大学 杉江 修治

1 総合的な学習の時間をどう捉えるか

情報化、国際化の時代を迎えて、教育改革がさまざまに試みられてきました。そこには、社会の変化とともに生じてきている子どもの変化、それも問題行動として表面化してきていることがらに対する対応も含まれます。

1970年代の後半から、教育実践の場では「個」が強調されるようになっていきました。一斉指導による画一的な指導の元に、個が埋没させられているという認識があったように思います。教育は、子どもたち一人ひとりの自己実現を最大限援助する営みですから、個への着目という観点は正しいものだったといえるでしょう。

しかし、そこにはひとつの誤りがありました。「個」を他人と切り離して理解したことです。「個」の教育とは何かについての理解が浅かったのです。したがって、指導法の関心も個別指導に偏り、それまで理論的にも実践的にも着実な積み重ねをしてきた協同的手法、すなわち社会的相互作用を積極的に用いた指導法に目を向けなくなってしまいました。「集団を通して個を生かす」という観点を忘れた実践が多く重ねられてきたのです。

今回、「総合的な学習の時間」が設定された背景には、1989年改訂の学習指導要領が示した新しい教育観を実現したいということがありますが、これも、文面だけでは、教育の目標があくまで「個」の興味関心、「個」の積極的な学習態度などにとどまってしまう懸念を含んでいます。その後の中教審答申などで言及された、幅広い「生きる力」の育成と関わらせて、「総合的な学習の時間」の意義を一人ひとりの教師が、そして1校1校の学校の教師集団が捉え返す作業をする必要があるように思います。

新たな時代の教育的要請とは何でしょうか。社会の国際化に対しては、そこに適応する技術を「個」が身につけることが大切なのでしょうか。情報化社会に適応する技術を「個」が身につけることが大切なのでしょうか。わたしは、そのような社会の変化を理解し、人々がその中でより幸福に暮らせるような社会づくりをめざす「個」の育成こそが今求められているのではないかと考えます。「変化に適応する個」にとどまらない「望ましい変化を作り出すことのできる個」が大切なのだと考えます。「総合的な学習の時間」を、個を切り離し、学習が個だけにとどまるような機会としてはいけないのではないのでしょうか。

2 バズ学習・協同学習理論の必要性

「総合的な学習の時間」では、必然的にグループ学習が必要だといわれてきています。ただ、技法としてグループを入れるという発想はよくありません。戦後しばらく、生活カリキュラムが中心となって進められた教育では、積極的にグループ学習が用いられました。それは民主的な活動として評価されていますが、1950年を境に急激に消えていった理由は、単に教育に対する右からの圧力だけではありませんでした。教師

の勘と経験だけで進められた理論のない実践であったという点も大きな問題だったのです。

「総合的な学習の時間」を進めるにあたって、われわれは適切な理論をもっているでしょうか。実践はまず教育論、教育観があり、それを実現するための模索があるというのが順序です。その模索の過程で学習指導の理論的研究を取り入れていくという作業が必要なのですが、その準備はなされているでしょうか。現状では、生活カリキュラムの折と同様の準備不足があるように思います。このままでは、結局今までどおりの「教え、導く、学ばせたつもり」の授業になるか、「自由の尊重といいながら実は放任」の授業になりかねません。今、本当に求められている学力の意義を追求し、それを実現する機会として「総合的な学習の時間」を創造することが求められています。

バズ学習は1960年頃にその基礎が作られました。古いという評価は当てはまりません。なぜなら、この時期すでに、ブルーナーが『教育の過程』で、今、学習指導要領に載せられている新しい学力観と同様の学力の必要性を説いているのです。バズ学習はそのような時代背景の中で研究が進められてきました。その中身は今に十分通じるものですし、今だからこそバズ学習の意義がより良く分かるようになってきているのです。

1980年代に入り、先進諸国では人間関係を基盤とした協同学習の意義に気づき、それは現在ではもっとも関心と呼ぶ指導法となっています。また、実践化も広く行なわれています。「総合的な学習の時間」の実践にあたって、経験のみからの発想でよしとする不精を捨て、このバズ学習・協同学習の原理を学習しないでは教育のねらいを実現することは難しいでしょう。

3 バズ学習・協同学習の基本

バズ学習・協同学習は、互いに育ち合う仲間だという学習集団の中の信頼関係、自分の成長を教師が願っているという確信の持てる教師との信頼関係が生む、学習への動機づけ、意欲づけに注目する指導法といえます。それは技法ではなく、教育心理学の実証的研究に支えられた指導論なのです。

そこではまた、積極的に社会的相互作用、すなわち話し合いを導入しますが、それは学習の効率を高めるだけでなく、学習内容を社会的知として修得させる働きももちます。学習を、個にとどまらない、より幅広いものとするのが可能になるのです。

ただ、実践にあたっては、バズ学習・協同学習の理論を学ばなくてはなりません。グループを組めば協同学習になるわけではありません。児童生徒の参加・協同・成就に配慮した実践をみがくに際して、この全国バズ学習研究大会での参加者同士の相互作用が積極的な意義を持つものと思います。

<参考図書>

- 有元・加藤・望月・杉江編 1997 『学校は変わるか』 日本教育総合研究所
ジョンソン他(杉江・石田・伊藤・伊藤訳) 1998 『学習の輪：アメリカの協同学習入門』 二瓶社
杉江修治 1999 『バズ学習の研究』 風間書房

第1分科会

1A教室

創意を生かしたグループでのライティング活動の工夫

杉並区立松ノ木中学校 廣澤一恵

『バズ学習』を生かした学級集団の育成

土岐市立泉中学校 山内芳彦

学校態勢で取り組んだ環境教育

—そこから中学校における総合的な学習の在り方を考える

春日井市立南城中学校 堤 泰喜

助言者

梶田正巳（名古屋大学）

阿部吉一（春日井市生涯学習室）

池田 洋（尼崎市教育総合センター）

小島幸彦（中京短期大学）

司会者

田川正樹（春日井市立中央台小学校）

記録者

佐方利明（春日井市立高蔵寺中学校）

創意を生かした グループでのライティング活動の工夫

杉並区立松ノ木中学校教諭

廣澤 一 恵

1. はじめに

中学校英語科の授業の重点としてのコミュニケーション能力の育成が言われるとき、音声を介した「聞くこと」「話すこと」がまず念頭に置かれ、「書くこと」に関しては、あまり重きが置かれていない。「聞く」「話す」「読む」「書く」の四技能の中で、「書くこと」は“もっとも必要性は低く習得するのは難しい” (Byrne, 1988)、故に、英語に関しては初心者、初級者である中学生には導入が難しいと考えるためであろうか？

筆者は、書く目的や読者を意識したコミュニケーションとしてのライティングにも目を向ける必要があると考え、初歩の段階からでも、導入の仕方に工夫さえ加えれば、ある程度まとまった内容の文を生徒たちに書かせることは可能であると考えている。また、このライティング活動にグループ活動を取り入れることで、生徒たちの意欲を引き出すことができるのではと考え、実践してきている。

ここでは、これまでの実践活動を報告し、この活動が題材の選び方等により、他教科との連携や総合的な学習に発展し得る可能性を考えていきたい。

2. 実践報告

(1) 対象

松ノ木中学校現3年生（全3クラス、96名）

(2) 時期

平成9年度～11年度

(3) 活動内容

①概要

現3年生が1年生であった平成9年度の2学期から、折りにふれ、自分のことや周囲のことなどを英語で表現させる活動をしてきている。

3年間の主なグループでのライティング活動としては

- 自己紹介 (1年2学期)
- 家族や友人の紹介 (1年2学期)
- 料理の調理法 (1年3学期)
- ゴールデンウィークの報告 (2年1学期)

- 日記 (2年夏休み――個人)
- 遠足についての壁新聞 (2年2学期)
- クイズ作り (2年3学期)
- 友好都市(オーストラリア)からの訪問生を紹介する新聞 (3年1学期)
- 意見を述べる (3年2学期) がある。

②グループでのライティング

グループでのライティング活動といっても、本来「書く」ということは個人の作業である。グループ活動を、この個人の活動と関連づけるのは、ライティングの過程において、または、書いたものをまとめあげる際に、の2種類が考えられる。

ライティングの過程においてのグループの活用法としては、

- アイディアを練る際のブレインストーミング
- 書いたものをお互い読み合うPeer Reading
- お互いの作品を校正し合うPeer Editing

などがあり、ブレインストーミングの時はもちろん、読んだり、校正し合う場合でも、自由に感想や意見を交換し合い、疑問点を確かめ合ったりすることができる。ペアでの活動も考えられるし、5～7人の生活班のグループということもできる。班でお互いの物を読み合う活動の時には、書いたものを時計回りに回覧し、余白に英語または日本語で感想等を書かせるようにした。

グループとして作品をまとめあげるには、大きく次の二つの方法が考えられる。

- 個人で書いたものをグループ単位でまとめあげる文集形式
- グループで話し合い、まとめあげ、一つの作品に書き上げていく新聞形式

ここで、便宜上文集形式と新聞形式の二つに分けたが、中学生の生徒たちに限られた授業時間の中で英語のライティング活動をさせるとき、果たして皆が十分な分量を書くことができるとは思えなかったし、作品を読むにしても、単調なものになる恐れがあった。そのため、寄せ書き式壁新聞の形態を取り、助け合うこととした。結果的には、壁新聞形式を取ったことにより、お互いに書いていることが紙面でよく見え、一つの紙面を作り合うことで一体感が生まれ、作品の内容、生徒たちの協力といった点で好影響があらわれたのではないかと思う。

③グループでのライティング活動をさせる際に配慮したこと

- (英語の授業の一貫としての活動なので) まず、十分に英語を「聞く」「読む」「話す」活動をさせ、「書く」ための素地を作る。
- 生徒たちの生活や興味と結びついた題材を選ぶ。
- 誰に読んでもらうために書くのかはっきりさせる。
- 伝える、ということに重きを置き、細かな文法上の間違いについては特に注意をしない。(accuracy vs. fluency)

- お互いに助け合い、教え合うように指示するとともに、普段の授業から暖かい雰囲気作りをする。
- 良いと思ったことをお互いに褒め合い、できることは自分でも取り入れることを指示する。
- 文章の量についてはこだわらない。
- 英語を書く以外に、グループの作品を作り出すにあたって遊びの要素を加える。(イラスト、装飾、など)
- 必ず発表の場を与え、他の人の作品を読む機会を与える。(廊下等への掲示、作品集の印刷・配布、作品を読んで答えるクイズの時間を授業中に設けるなど)

3. 他教科との連携――総合的な学習に向けて

(1) 家庭科との連携

1年3学期に扱った「料理の調理法」についてのライティングは、教科書の1レッスン(「アップルパイの作り方」-秀文出版Total English)を発展させたものである。が、ここで生徒たちが題材として使ったのは、家庭科で2年生が夏休みの宿題として提出した「我が家の家庭料理」のレポートである。

生徒たちは、アップルパイの材料、用具、作り方の手順を元に、主に麵を使った料理である2年生のレポートを参考にして、外国の人に向けたレシピ作りに取り組んだ。こちらのねらいとしては、教科書に調理法のセクションが出てきたので、これを機に英語科と家庭科の連携を少しでも図りたいということ、同時に、生徒たちの一年先輩にあたる2年生の家庭科の作品を使うことで、学年のつながりを少しでもより有機的なものにしたということがあった。

自分たちがよく知っている2年生のレポートを読んで、生徒たちは素直に感嘆の声を上げ、その英語版を作ることに意欲を燃やしていた。また、できた英語の作品をコピーして、作者である2年生にプレゼントすることで逆方向の交流を図った。家庭科担当の教諭からは、この活動は次年度に自分たちもやることになる課題に対しての予告編の役割も果たし、生徒たちの興味が深まったとの評価を得た。

欲を言えば、英語のレシピを使ってのクッキングなど、もっともっと教科の連携を生かす活動は考えられるのであるが、時間等の制約があって実現はしていない。総合的な学習時間などを使えば、こんな活動も可能になるであろう。

(2) 意見を述べる

これは教科書のディベートのセクションを発展させたもので、今回は「英語をなぜ勉強するのか」について、英語学習賛成・反対の立場から、それぞれが意見を書いた。3年生の英語の教科書は、環境問題や国際平和、ボランティア活動など様々な題材を取り

上げているので、題材の取り上げ方によっては、総合的な学習へと発展する余地が充分あると思われる。今回3年生1学期に行った「友好都市からの訪問生を紹介する新聞」については、彼らの一学年上の生徒たちに対しては2年生2学期に行った。訪問生が来る時期や所属する学年に合わせての調整で、これも一教科としてというよりも、時間や事情が許せば学年や学校として取り組むことができる分野であろう。

4. グループ活動と生徒たちの協力——違いを認め、励ます心

生徒たちはグループ活動が好きである。無駄な動きも多いようであるが、和やかに相談したり、書いたり、作業をする。遅れている生徒のことも、グループだと援助しやすいようである。

A君という生徒がいて、ひらがなも鏡文字になってしまうのだが、周囲に暖かく助けられ自己紹介では、I am A. I like trains. という文を作り上げた。英語を勉強すべきかどうかという意見を述べる場では、グループの仲間に教えてもらいながら、I like English. We should study English. と書いた。

こんな暖かい雰囲気を作り出すのにグループでの活動も一役を買っているものと思われる。

5. 今後の課題

今回紹介した事例は、他教科との題材の共有や、学校・学年行事と関連していくようには心を砕いたものであっても、あくまでも英語科の教科が主体であって、これ自体が総合学習と呼べるものではない。総合学習に向けてのステップの一つの提案として受け取っていただければ幸いである。

英語科の立場からすると、文法の間違いをどこまで指摘するか、とか、「書くこと」と他の3技能との統合などまだまだ課題は多い。ただ、今回3年間を通して生徒たちにグループで助け合いながらライティング活動をさせてみて、私自身がはっとしたこと、学んだことも多い。上のA君の例もそうであるが、生徒たちはいつもこちらの期待以上に応えてくれる。最後の「意見を述べる」文については個人で書く所で終わらせようかとも思ったのだが、生徒たちに希望を問うた所、「ぜひグループでやりたい」と言う。向上しよう、成長しよう、という前向きな芽をこちらの怠り心で摘み取ってはいけないと、今、痛切に感じている。

参考文献

Byrne, D. 1988. Teaching Writing Skills. London: Longman.

『バズ学習』を生かした学級集団の育成

岐阜県 土岐市立 泉中学校
バズ推進委員会 山内 芳彦

1 はじめに

本校では昨年度まで4年間に渡り「自ら学ぶ力」に焦点を当てた研究実践を積み重ねてきた。それは支持的風土が醸成された学級づくりを基盤にした組織的な「学び合い」が構築されていく授業づくりを骨子としていた。これを通して生徒の学ぶ意欲を促し、主体的な問題解決活動ができることを目指してきた。そうした実践の中で個にスポットが当てられ、個のよさを伸ばしていくことに成果があった反面、集団で考えを練り上げていく力が十分でないことが明らかになった。換言すれば、学級の「人間関係の希薄さ」が課題として明らかになったのである。

そこで本年度は、昨年度までの研究の基盤となった支持的風土が醸成された集団づくりを見直すこと、つまり、『バズ学習』を基盤としたお互いがかかわり合える学級集団、学習集団づくりの推進をしていきたいと考えた。それにともない、昨年度までの研究推進委員会をバズ推進委員会と名称変更し、具体的な生徒の姿をもとに『バズ学習』の実践を積み重ね、研修していきたいと考えた。

2 主題設定の理由

本校は昭和36年の冬より、長年に渡り『バズ学習』を取り入れた教育活動に取り組んできた。また、平成元年度には全国バズ研の会場校として『バズ学習』の研究発表も行った。発表後も『バズ学習』の精神は泉中教育の根幹として位置づけられている。生徒の日々の生活の中にも、授業中の「バズ」や清掃の「開始バズ」「終了バズ」、帰りの会の黙書後の「バズ」など、『バズ』という言葉は浸透している。

『バズ学習』の基本理念は「よりよい人間関係を基盤とする教育」、つまり、「個人はよりよき集団を形成し、集団はよりよき個人を育成する」という考え方で全ての学習活動を遂行していくことである。それにより学級内の人間関係の改善と協力的な学習活動による全員参加の授業の実現が目指される。

しかし、ここ数年、本校生徒の落ち着きのない言動が目立っている。生徒の生活姿勢や授業における学習姿勢に問題が出始め、生徒指導上の問題をいくつかかかえるようになった。教師はその対応に懸命であったが、生徒は仲間のよくない行動を見かけても注意をすることはほとんどしなくなった。学級でもそれを全体の問題にしきれない状況もある。さらに、問題を持たない一般の生徒の間でも、自己中心的な言動があり、ともに高まろうとする姿勢に欠けがちである。つまり、生徒同士の人間関係が希薄で、つながりが弱いといえる。具体的には次のような生徒の実態を捉えた。

- (1) 係、当番、掃除等の日常活動や行事において、自分さえよければよいという安易な考えが目立ち、集団生活の中で自分の果たすべき責任を果たそうとしない生徒がいる。さらには、仲間のよくない行動に妥協してしまったり、同調してしまったりする生徒がいる。つまり、仲間と積極的に前向きな活動を創り上げ、深め、仲間とともに高まろうとする姿勢に欠ける。
- (2) 教室環境が乱雑になりがちで、清掃活動を通してお互いの環境を守ろうとする意識に欠ける。
- (3) 次時の学習準備、時間行動、聞き方、発言等仲間と学ぶ上での学習習慣の定着が不十分である。

こうした実態から、生徒一人一人を切り離して教育相談的見地から個別指導するだけではなく、生徒を社会的、集団的な存在としてとらえた指導援助をしていくことの重要性が改めて課題となってきた。つまり、生徒一人一人の人格や個性が認められ、生かされていく相互作用を持った学級集団づくりが課題となったのである。さらに言えば、「創造・自主・協同」の学校の教育目標のもと「個」と「集団」とのかかわりを大切にし、一人一人が高まる集団を育成していくことが本研修主題の願いなのである。

また、本研修の内容の骨子は次のようである。学級活動、道徳授業、教科授業の中で『バズ学習』を生かし、位置づけていく。その中で、生徒が『バズ学習』による課題追究の深まりや成就感を実感できるようにするために「意図・テーマ・形式・評価方法」を明確にした必然性のある『バズ学習』の位置づけ方と生かし方を共通理解し、実践とその累積をしていく。

このように生徒同士の「人間関係の希薄さ」にメスを入れ、そこを視点として個や集団を見直し、生徒による教え合い、話し合い、確かめ合う相互作用を通して、よりよい人間関係を築いていこうとするのである。さらに、共通の目的意識を持って協調し、目的を達成しようとする『バズ学習』を学校教育全体の柱として共通理解し、共通実践し、その累積をしていくことは大きな意義があると考え本研修主題を設定した。

3 研修実践の仮説と内容

(1) 研修の仮説

学級活動、道徳授業、教科授業の中で『バズ学習』を位置づけ、生かしていけば、よりよい人間関係を築きながら個人が高まる学級集団は育成される。

(2) 研修主題追究のための方途と内容

学級活動、道徳授業、教科授業の中で『バズ学習』を位置づけていく。その中で、生徒が『バズ学習』による課題追究の深まりや成就感を実感できるようにするために、必然性のある『バズ学習』の位置づけ方と生かし方を共通理解し、実践、累積していく。

<方途>

- ① バズ学習を授業に取り入れる意図を明確にする。
- ② バズ学習の課題（バズテーマ）を明確にし、生徒にとって必然性のあるものにする。
- ③ バズ学習の形式（種類・方法）を明確にし、課題を深められるように仕組む。
- ④ バズ学習によって課題追究が深まったかを評価する。

<内容>

① 学級への所属感を高める学級活動の実践

バズ学習を生かし、学級の仲間とともにかかわり合う力をどう育てるか。

- ・学活授業、行事の取り組み、また、掃除の開始・終了バズ、帰りの会でのバズ、漢字・計算ドリル等での『バズ学習』のあり方

② 道徳性を高める道徳の実践

バズ学習を生かし、学級の仲間とともによりよい生き方を追求し合う力をどう育てるか。

- ・道徳授業における『バズ学習』のあり方

③ 自己実現を目指す教科指導の実践

バズ学習を生かし、学級で学び合う力をどう育てるか。

- ・各教科における『バズ学習』の姿の明確化と、教科授業内での『バズ学習』のあり方

4 実践事例

(1) 学級への所属感を高める学級活動の実践

2年生「職場体験学習へ向けて～働くことの目的と意義～」

2年生では7月に地域の事業所の協力を得て、1日（終日）の職場体験学習を行った。そこへ向けての意識を高めるために、5月に学活で「働くことの目的と意義」の進路学習を行った。

その中で「色々な苦勞をしながらも、なぜ前向きに働いているのだろうか？」という生徒の素朴な疑問に基づいた課題設定を行った。そして「働く目的を出し合ってみよう」というバズテーマで意見交流をする探究バズでは、家族から聞いてきた話から一般的な考えまで多様な考え方を出し合うことを大切にされた。また、働くことを自分に引き寄せて考える後半2回目のバズでは、他の意見を参考にしながら、自分をありのままに見つめることの大切さを教師が話し、援助とした。

グループによるバズを取り入れることによって、将来の進路希望など個人的な思いや本音を話せる雰囲気ができ、生徒が互いにかかわり合いながら課題の追究内容を深めることができた。

(2) 道徳性を高める道徳の実践

1年生「公正・公平4-③『買えないパン』」

道徳授業においてバズ学習の種類を展開前段で二つ考えた。資料を読み、課題を持つ「発見バズ」と主人公の気持ちを考えたり、言動の要因を考えたりして深める「探究バズ」である。そこで、本授業では資料を読んだ後の感想から、多くの生徒が「母が障害者からパンを買うことに戸惑いを感じる主人公に共感していたようであったため「どんな気持ちから母の腕をつかんだのだろう」とバズテーマを設定した。

以下はある班の話し合いの様子記録の一部である。

- A「パンはパンなのにどうして「わたし」は母の腕をつかんだのか…？」
B「作った人のイメージが悪いんだよ。」
C「まずそんなパンなのかな？」
D「味より作っている人が問題だよ。障害者が作ったパンというのが…。その人たちが作っている時に何か混ざりそうで汚い感じがする…。」
C「そんなパンだから、買うと周りの人から変に見られるから止めたんだ。」
A「でも、それっておかしいんじゃない？」

生徒はテーマに対する自分の考えをすぐにプリントに書き、その後の探究バズでも自分の生活経験をもとにしながら全員が発言し、多様な意見の交流ができたため主人公の心情に迫ることができていた。道徳授業において共感場面でバズ学習を取り入れながら、仲間とともによりよい生き方を追求できた授業であった。

(3) 自己実現を目指す教科指導の実践

3年生【数学】「平方根の存在」

数学科では授業の中でバズ学習を行う時、次の三点を留意している。

- ①バズ学習をする必然性のある課題設定を行い、生徒主体の流れを仕組む。
- ②バズ学習に対する評価を授業内で行う。
- ③班長だけでなく、数学リーダーを中心として活躍させる。

また、「バズ学習を位置づけた指導計画」を作成し、そこでは「バズの種類」という項目を設け、バズ学習を意図的に仕組んでいる。

本時では、導入での素材提示に対しての生徒のつぶやきから「面積がちょうど2cm²になる正方形を書き、1辺の長さを求めよう」と生徒の意識と教師のねらいが一体となったところで課題設定がなされていた。

個人追究後の「探究バズ」では、今までバズを使わないと追究をあきらめてしまいがちだった生徒も、得意な生徒と一緒に自分もなんとかかわかりたい、自分の考えをわかってもらいたいと、図や数式を使って懸命に説明し合い、探究する姿が見られた。

そして評価については、認知面だけでなく態度面からの個人評価も行われていた。

5 成果と課題

(1) 成果

- ◎ 学級活動、道徳、教科授業の中で『バズ学習』を位置づけ、生かしていくことにより、生徒が相互に意識し合い、かかわり合いながら、よりよい個人として高まっていける学級集団が育ちつつある。
- ① 意図を明確にした『バズ学習』を積極的に取り入れることにより、生徒は仲間を意識し、ともに課題追究をしていこうとする学級の風土ができてきた。
- ② 生徒の意識や言葉をもとに『バズ学習』の課題やバズテーマを明確に設定することにより必然性が生まれ、追究に対して意欲的になれる生徒が多くなってきた。
- ③ 『バズ学習』の形式を明確にし、ねらいに応じて種類や方法を設定することにより、生徒自身が見通しを持って、主体的に活動を進めることができるようになってきた。
- ④ 『バズ学習』による課題追究の成果を評価することにより、思考の深まりや広がりを実感し、達成感を持つ生徒が増えてきた。

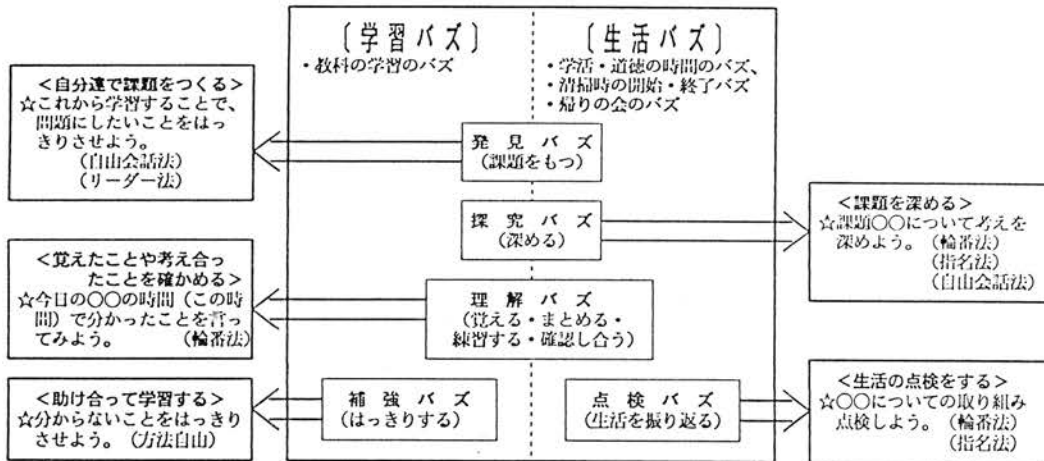
さらに付け加えるならば、本年度に入り、昨年度まで見られたような生徒指導上の諸問題は激減した。また、スポーツをはじめ、学習面でも対外的な成果を数多く修めている。

生徒が落ち着いて学校生活を送れるようになってきたのは、生徒の人間関係がよりよくなってきたからだと考える。「希薄な人間関係」から「温かな人間関係」へと学級をはじめとする学校の支持的風土が醸成されつつあるといえる。

(2) 課題

- ◎ 生徒が自発的に課題を生み出し、協同の問題として追究方法を探り、解決していこうとする「集団としての自治意識」を高める必要がある。そして、さらに「集団がよりよい個人を育成する」ことに重点を置いた研究実践を積み上げる必要がある。
- ① 生徒が自ら課題を掘り起こし、『バズ学習』により進んで追究していける風土づくり。
- ② 生徒にとって必然性のあるバズ課題の設定と、認知面だけでなく態度面もふまえたバズテーマの設定。
- ③ 生徒相互での追究により深まりを生み出せるようなリーダー指導と、そうした仲間とともに探究することによって一人一人の思考が深まり、個を鍛えることになる「探究バズ」のあり方。
- ④ 相互の認め合いだけでなく、仲間との探究の事実から自分を振り返る個人評価、相互評価の工夫。

〔場に応じたバズ学習の種類〕



〔発見バズの進め方〕

- 1 これから学習することで、問題にしたいことをはっきりさせよう。
- 2 ○○さんの問題わかりますか。
- 3 みんなの問題にしてみます。

〔理解バズの進め方〕

- 1 (この時間で) わかったことを言ってみよう。
- 2 ○○さんから輪番法で発表して下さい。
- 3 つけ加えることやわからないところ(質問)はありませんか。
- 4 では、今までの話し合いでわかったことをノートにしっかりとまとめておきましょう。

〔探究バズの進め方〕

- 1 (今、先生から) 出された課題について深めたいと思います。
- 2 どんな課題であったか、○○さん説明して下さい。
- 3 まず自分の考えを発表できるようにまとめて下さい。
- 4 では○○さんから、輪番法で自分の考えを発表して下さい。
- 5 さらにつけ加えや賛成反対の意見をそれぞれ出して下さい。
- 6 大体深まったようですから、今のそれぞれの考えをノートにまとめて下さい。

〔点検バズの進め方 (点検カードを使う場合が多い)〕

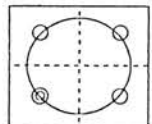
- 1 今日の○○はできましたか。輪番法で言って下さい。
- 2 今日の○○は、△△のところがしっかりできました。
- ▲▲がまだしっかりできていないので、班のみんなで頑張ってください。

〔補強バズの進め方 (プリントを使う場合もある)〕

- 1 (今日の○○の学習で) わからないことがあった人は、どしどし出して下さい。
- 2 説明できる人はありませんか。
- 3 今の説明でわかりましたか。それではもう一度説明してもらいます。

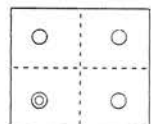
〔バズの方法〕 (リーダーは班長が兼ねる場合が多い。)

1 輪番法



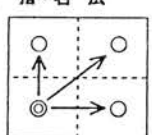
- ◎リーダーが、○○さんから順に言って下さいというふうに回していく。
- ◎一人一人の考えを全員で確認していくときなどに使う。

4 リーダー法



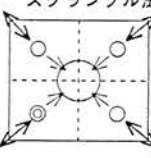
- ◎リーダーが課題にどう取り組んでいかを考え、説明しながらやっていく。
- ◎リーダーが、ひとつの課題に対して話し合っていく中でまとめながら、メンバーに合ったやり方(方法)を考えて進めていく。

2 指-名法



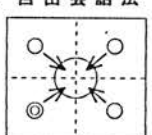
- ◎リーダーが、意図的にメンバーに意見や考えを求めていく。
- ◎輪番法の発言の後に、同じ考えや違う考えを整理し、考えを高めていくときなどに使う。
- ◎点検バズするとき、一人一人の達成状況を確認するときを使う。

5 スクランブル法



- ◎班(小集団)で話し合った考えや、自分の考えを他の班(小集団)や意見を求めたい個人と交流し合う。(但し、感情的な好みによる、意見交流ではない。あくまでも、必要性のある班や個人の意見交流である。)

3 自由会話法



- ◎リーダーが、まず、メンバー全員にテーマをしっかり確認させたあと「話し合います。」と言って、メンバー全員で取り組んで自由に会話していく。
- ◎一人の子にわかめたいときにも使っていく。

学校態勢で取り組んだ環境教育

～ そこから中学校における総合的な学習の在り方を考える ～

愛知県春日井市立南城中学校 堤 泰 喜

1 はじめに

本校が、愛知県教育委員会の委嘱を受け、環境教育の研究発表をしてから、早いもので5年が経過した。PTAの“制服リサイクル”など、存続している取組もあるが、当時の様子を知る職員は私を含めて3人となった。この間、本校はいわゆる“荒れ”を経験した。「環境教育を推進してきた学校が荒れるなんて…」「あの研究は一体何だったのか…」と自己嫌悪と自信喪失に陥った職員は多かった。私自身もこの3年間は、学校の立て直しに奔走する毎日で、いつしか環境教育のことは、記憶の奥底に封印をできてしまっていた。

それを蘇らせてくれたのが、今回の指導要領の改訂にともなう「総合的な学習の時間」の創設である。本校では、この夏休みに職員に“宿題”が課せられた。「2002年に向けて何をどうしていくべきか」について1人1人の私案をまとめりポートを提出するのである。みんなで創り上げる！という点では、大変意義のあることなのだが、なにぶん勉強不足の私には、それこそ「何をどのように考えていけばよいのか」が全くわからず、この夏休みは、悶々とした日々を過ごした。しかし、結局のところ、“考える糸口”になったのは、やはり、あの環境教育の取組であった。

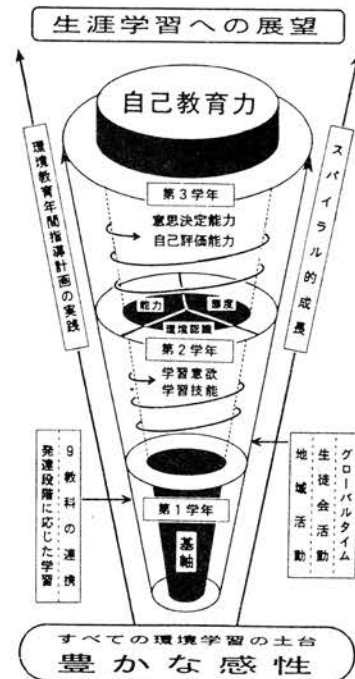
2 本校の環境教育

「Think Globally , Act Locally .」を合い言葉に、環境教育を学校教育活動全体の中に位置付け、中学生として何ができるかを基本に据えながら、推進していくことをめざした。以下、その概要を簡潔にまとめる。

教科指導 教科における環境教育は、生涯学習の重要な基礎的段階であると考え、「自己教育力」の育成を視野に入れながら、実践をすすめた。

① 授業法の改善 ～多種多様な学習活動～

- ・ 地域素材の発掘と教材化
- ・ 「体験的学習」「問題解決的学習」の重視
- ・ Discussion（討論授業）の重視（☆バズ学習が土台）
- ・ 授業における基本的学習ルールの徹底
- ・ “多様性を認め合う”学習集団づくり
- ・ 「自分はどう考える」という意思決定の重視
- ・ “表現の場”の充実



② 「環境教育年間指導計画」（軸テーマ別環境学習配列表）の作成

- ・ 環境教育とは無縁のように思えながら、視点を少し変えるだけで、環境教育の学習になりうるものを教育課程から洗い出すとともに、生徒の実態から派生する「教師の願い」を付加した授業を加えて、系統的に配列した。
- ・ 生徒の発達段階に応じた指導をすることができた。
- ・ 他教科の学習内容が一目で把握できるので、教科間の連携を図ることができた。

③ 生徒の変容をとらえる評価の工夫

- ・ 生徒自身が学習活動を振り返り、目標への達成感を自ら評価して、今後の学習の改善を行っていかうとする「自己評価」を積極的に取り入れた。
- ・ 「座席表」を活用し、授業中の指名や授業後の変容の把握に役立てた。

道徳 中学校学習指導要領に示された22項目を検討し、項目相互の関連や環境教育全体との関連を考え、本校独自の『環境関連6項目』を設定し、『道徳教育年間指導計画』を作成し、“モラルジレンマ”を軸とする話し合いの授業実践をすすめた。

特別活動 環境や環境問題に対する個々の高まりを、自主的・体験的な活動を通してより確かなものとし、さらに身近な問題に対する積極的な実践力へ発展させた。

① 学級活動

学級の創意工夫で環境に関する取組を行う時間を「グローバルタイム」と命名し、担任の指導のもとで、学級ごとで知恵を出し合って実践した。

（例：「給食の残菜を利用して肥料を作ろう」「地蔵川を見つめて」など）

② 生徒会活動

リサイクル運動（牛乳パック・トレー・アルミ缶・スチール缶・乾電池など）、校外清掃、生活環境改善運動、環境集会、老人ホーム訪問、環境委員会の設置などの取組みを行った。

学校行事 宿泊学習・野外学習では、動植物の観察や自然体験など、自然とのかかわりを重視した。修学旅行では東京と春日井の住環境の比較を、校外学習では見学地でのテーマ別研究を行った。学校祭では、環境にかかわる展示を行った。

その他 ◇ PTAとの協力（地球資源回収活動、制服リサイクル運動）
◇ OISC Aとの提携（環境講演会、フィリピンへの植林活動、文具を送る取組）
◇ 『グローバルルーム』の活用 ◇ 『南城中だより』の発行 など

3 「総合的な学習の時間」について自分なりに考えていること

(1) “地域”がキーワード！ ～地域に入り、地域を見つめ、地域に学ぶ～

中央教育審議会専門委員として、「総合的な学習の時間」の創設に直接的にかかわられた東京学芸大学の児島邦宏教授は、創設の理由について次のように述べている。

なぜ「総合的な学習の時間」をつくったかという理由の一番大きな部分は、世の中の現実を見せながら子どもを大人にしていくという考え方が基本にあるわけです。（中略）特に急激な社会の変化が予想される、しかも先行きわからない、今後不透明な社会になるだろう、こういう世の中で子どもたちが世の荒波に押し流されたり押しつぶされたり、また、波のまにまに漂っているのでは困る、ついていけばよろしいというのでは困るわけで、そういう厳しい社会を自分で乗り切っていくにはどうするか、いわゆる**主体性の確立**であります。社会的な自立を図る。自分で世の中の問題をしっかり受けとめて、自分の力によって世渡りができる、こういう子どもたちを育てていかないとこれは大変なことになるだろう。（『中学校』NO. 553掲載の講演要旨より）

では、世の中の現実と子どもとが直接的に向かい合う学習を展開するにはどうするか。その最も有効な手段は、地域にどっぷりとつからせ、じっくりと見させ、そこから生々しい現実の社会の姿を学ばせることではなかろうか。やはり、「総合的な学習の時間」のキーワードは“地域”である。とりわけ、職場体験・ボランティアなどの**社会参加**や地域の人材と学校の教師との**チーム・ティーチング**は有効であろう。

(2) 課題（テーマ）はトライアングルで！

「総合的な学習の時間」の課題として、一般的に言われているのは、「横断的・総合的な課題」「生徒の興味・関心に基づく課題」「学校・地域の特色に応じた課題」などが挙げられる。私が気になるのは、2つ目の「生徒の興味・関心に基づく課題」である。興味・関心だから何でも好きなことをやらせればよいということになると、本来の目的から大きくそれてしまうと思う。中学校1年生から、学び方や調べ方、ものの考え方等をじっくり積み上げ、その延長線で「卒業研究」として自由に課題を選択させるのならよいが、早いうちから子どもに自由に課題を選ばせるような活動はどうかと思う。上の3つの課題をバラバラにとらえるのではなく、3つが相互に重なり合うトライアングルをイメージして課題を設定すべきであろう。その意味で“環境”は、どの地域でも取り組めて、しかも世の中とのかかわりの中で「社会的興味」「社会的関心」を持たせうる、“絶好”のテーマといえる。また、「地球市民を育てる」など、軸（柱）となる目標、「こういう子どもを育てたい」という**学校全体のビジョン**を持つべきではなかろうか。カリキュラムの作成は、**学校態勢**（学年態勢）で行いたい。実際に学習を展開する時

は、学級が主体となって担任が指導する場面も多々あるであろうが、計画や準備の段階では、すべての教師が知恵とエネルギーを結集しないとできないと思う。

(3) “はい回る体験学習” にしたくない!

富山大学の山極 隆 教授は、「総合的な学習の時間」が、単なる興味本位の体験学習 (=体験ごっこ) にならないためには、学習活動に適合したスキルの習得を明確化するとともに、“評価” が重要になってくると述べている。この評価の問題は、かなり時間をかけて吟味すべき事柄ではあるが、今の私には、勉強不足の為、次のような内容しか思いつかない。

- ・ 各時間ごとに自己評価・相互評価させ、ファイルにとじさせる。
- ・ そのファイルを見ながら、担任が適宜“支援”を行う。
- ・ 日々の活動の観察だけでなく、ファイルの内容や作品、掲示物、発表などから総合的に評価する。(ポートフォリオ)
- ・ 生徒個々の総合的学習の取組の様子を、「通知表」に“文章記述”する。

また、体験中心の総合学習だけにとらわれず、読書指導を『学習活動』に位置付け、読解力・文章表現(感想文など)の鍛練を意図的に組み入れたり、コミュニケーション能力を高めるための「ディベート大会」を企画するなど、生徒が抱える課題(生徒の実態)に合わせた『学習活動』も組み込んでいくという発想も必要ではなかろうか。

(4) 教科をおろそかにしたら本末転倒!

完全学校週5日制によって、ただでさえ年間70単位時間の授業時数を縮減しなければならない。その上に「総合的な学習の時間」の創設である。しかも教師の多くは、この「総合的な学習の時間をどうするか!」という1点に意識が集中している。

今でさえ、「学力の低下」が問題視されているのに、2002年からの教育は本当に大丈夫なのかと心配になってくる。文部省は、「教育内容の厳選」「基礎・基本の確立」を唱えている。確かにその通りであろうが、単なる“スローガン”に終わらせず、本当に真剣に取り組んでいかないと、日本の教育ひいては日本全体が大変なことになると思う。

作家の高村 薫 氏が『毎日新聞』に投稿された中に次のような一文がある。

総合的な学習の時間 学習記録		年 組 番 氏名	
月 日 ()	第 週	時間目 /	時間 (計画時間)
テーマ			
活動内容	調査・体験・実験・製作・視察・まとめ・発表 その他 ()		
活動場所	担当の先生	先生	
学習評価	① 学習の課題にせまることができたか ② 計画通り活動できたか ③ 意図的に取り組むことができたか ④ グループの人と協力することができたか ⑤ 今日の学習に満足しているか	1	2 3 4 5
今日の学習でわかったこと・感想・反省	次回の確認	月 日 ()	
	概して どこ と偏次 ままからオンラインソフトアドバイス		
		印	

「ゆとりの教育」は、授業時間を減らし、履修科目を減らすことで、子供の自主性や個性を伸ばそうとしてきた。しかしそうして、何でもゆるされる自由に加えて、勉学の負担まで軽減された子供たちの個性や自主性の現状は、冷静に見てどんなものだろう。(中略)あくまでゆとりを優先し、あれもこれも学ぶ必要はないだろうということで、次々にかつての履修科目を学習指導要領から削除しているのは大人の側である。何を根拠に不要ときめるのかは知らないが、その結果、**学校で体系的に学ぶ内容に、ひよっとしたら今や、大きな不足が生じているのではないかと、ふと**考えた。大学に入った学生が、授業に必要な学力を身につけていないとしたら、そういうことになる…。 (「ゆとりの教育」が抱いたもの～深刻な学生の思考力低下～ 1999年7月4日『毎日新聞』朝刊)

この危惧を払拭するためにも、従来以上に“教科指導”に力を入れなければならない。学習(勉強)というのは、楽しくやって学力がつけばそれに越したことはない。しかし、すべてがそうであるはずがない。子どもが「嫌だな」と思うことでも、子どもにとって大切だなと思うことは、しっかりと教えこみ、徹底的に反復練習をして、基礎・基本を鍛え上げなければならない。その際、何を教えるかという「内容知」だけでなく、どのように学ぶかという「方法知」も、教科固有の「知」の形成において重視されるべきで、これも、“トレーニング(訓練)”によって身につけていくものと考えて。

教科で身につける力が弱ければ、総合学習がうまくいくはずがない。「知の総合化」「知のネットワーク化」など、所詮“絵空事”になってしまう。逆に、教科で十分に力がついていれば、それは、総合学習の支えになるし、社会に立ち向かう武器にもなる。

また、選択教科の性格が、「課題学習」「補充学習」「発展的で応用的な学習」というように、幅広くとらえることができるようになるので、生徒の実情に応じて、必要であれば、選択教科における“補充学習的な取組”も積極的に導入していくべきだと思う。

(5) 父母の理解を得るためのPR活動を!

父母は、「総合的な学習の時間」に代表される新しい教育の動きに、少なからず関心を持っている。私の家でも、「土曜日が毎週休みになるなら学習塾に行かせようかしら」「小学校でも英語やコンピュータを教えてくれるようになるのよね」などという言葉が妻の口から出てくる。地域のお母さん方のいわゆる“井戸ばた会議”でも、「総合的な学習の時間」について話題になることがあるという。父母が期待しているのは、多かれ少なかれ“目に見える成果”である。これは、「漢字がこれだけ書けるようになった」「英検で3級がとれた」「ワープロ検定にも挑戦だ」などというような“狭義のもの”もあれば、「福祉体験によって人の気持ちがわかるになった…」「ボランティア活動によって積極性が出てきた…」などの類いまで含まれる。いずれにしても、学校の取組が父母や地域社会から厳しく評価されていくわけだから、学校は、「こういう子どもを育

てたいから、こういう取組をしている」ということを、自信を持って“地域に発信”をしていかなければならないであろう。そしてそのことが、とりもなおさず、地域からの協力を得ることにつながっていくと考える。

4 おわりに

「総合的な学習の時間」についてのある講演の中で、講師の先生が「ある生徒は図書館で調べ学習をし、ある生徒はコンピュータ室でインターネットを楽しみ、ある生徒は教室で仲間とディスカッションをし、ある生徒は学校の外でフィールドワークをする。それが、同じ時間帯で同時進行でおこなわれる。そんなイメージを持ってほしい…」というような内容のお話をされた。その時、“荒れ”を経験して日が浅い私には「ある生徒は校舎裏にたむろし、ある生徒は視聴覚室で娯楽ビデオを堪能し、ある生徒は教室で煙草をくわえ、ある生徒は学校の外へ出てコンビニでお菓子を買う」というような光景が脳裏をよぎった。

生徒指導上の問題を多く抱えている学校において、「総合的な学習の時間」の創設は、“普通の学校”以上に労力が必要とされる。そういう話をすれば、文部省の方からはきっと、「小学校での学級崩壊、中学校における“荒れ”などの問題があるからこそ、これを解決する一つの方法として『総合的な学習の時間』をとらえ、在り方を考えてほしい」というようなお返えが返ってくるのではないかと思う。私は、こうした考え方には大筋では賛成している。時間はかかるであろうが、新しい教育の動きの中で、生徒の“健全育成”を図ることができるなら、それが理想である。

しかし、実際には、「規範意識の低下」や「家庭の教育力の低下」などの状況の中で、“焼け石に水”となることも十分に考えられる。したがって、「総合的な学習の時間」が本当にその効力を発揮するための土台は、「健全育成をめざした生徒指導の確立」にあるのではないかとさえ思う。「時間を守ることができる」「教師の言うことにじっくりと耳を傾けて聞くことができる」「学習のルールやマナーをしっかり守ることができる」「地域の方に礼儀正しい態度で接することができる」などができていないと、「総合的な学習の時間」は、特に中学校においては、ともすると破滅的なことになりかねない。

いずれにせよ、教師自身がしっかりと座標軸を持ち、その座標軸が振れない。いい意味での頑固さを持つ。子どもに迎合しない。子どもに媚びをうらない。そしてその一方で、決して子どもには威張らない。子どもの成長を常に考え支援する。そのような姿勢が大切ではなからうか。教師としての職業的アイデンティティーの確立と換言することができる。

これは、現在の私自身の最大の課題である…。

たいへん稚拙で具体性に欠ける内容ですが、中学校における「総合的な学習の時間」の在り方について“南城中学校でできること”という観点から作成した私案と時間割のプラン（紙面の都合上、第3学年のみ）を次ページに掲載しました。
詳細は、分科会で配布される「資料編」をご参照下さい。

第2分科会 1B教室

算数科における学習の改善—子どもとつくる学習めざして

練馬区立光が丘第八小学校 荒木正志

主体的思考力を高める授業の創造—ものづくりの学習を通して

春日井市立味美中学校 原田宗敏

個々の生徒の発想を生かした授業展開の工夫

杉並区立東田中学校 下斗米八穂

助言者

加藤孝史（春日井市相談室）

杉江修治（中京大学）

荒木正志（練馬区立光が丘第八小学校）

寺井正輝（春日井市立柏原小学校）

司会者

長縄秀孝（春日井市立柏原中学校）

記録者

松永昇也（練馬区立上石神井中学校）

算数科における学習の改善

子どもとつくる学習めざして

東京都練馬区立光が丘第八小学校 校長 荒木 正志

1. はじめに

小規模校、オープンスクールという特性を生かした学習・教育活動を進めていくことが、本校としての特色となっていくと考えている。またこの実践が来年度の学校経営方針の基盤となると考えている。この実践はベストのものではない。これから期待されるの学習の一方法ととらえ、担任教諭2名と共に実践を試みた。

当初、校内の職員に公開する予定であったが、保護者へも公開しようとなった。そして更に広げて地域や学校関係者にも公開することとなった。5時間の公開であったが、参観者は地域、全学年にわたる保護者、区教育委員会・近隣の学校関係者、未就学児の保護者、保育園の先生方を始め、中京大学教授の杉江修治先生、創価大学助教授の関田一彦先生・恩師の先生方に参観していただき、これからの学習改善に指針を与えていただき、深く感謝する次第である。

2. ここで進めたい算数学習

それぞれ子どもの得意なものを伸ばしていくことにより、個性は育っていくと考える。全員算数好きにしようとは思わない。一人でも多く算数学習の楽しさを発見させたいと基本的に考えている。

算数の学習は、偉大な先人が歩んだ道を追体験することではないか。先人の業績について時間を圧縮し、手法を簡略化し、方法手段を駆使していくことである。それは、子どもに創造・発見の過程を経験させることである。この過程を経験することが算数のねらいとなっていると考える。

(1) 算数学習のねらい

「面積」という言葉は算数用語である。4年の教科書には、ほとんどが「広さのことを面積といいます。」と記されている。広さ＝面積と考えてよいだろうか。4年生の子どもの「広さ」は日常語であって、「広さ」に対するとらえ方は様々である。「平面上で数値によって表される広さのことを面積という」ことがわかって、初めて日常語から算数の土壌に変わるのである。

この単元の学習では「面積は二数の乗法で示される」ことに気付かせていきたい。それには、長方形、正方形、平行四辺形の面積公式を作り出す過程から帰納的に二数の乗法に気付かせていく。子どもの反応によっては、三角形の面積公式まで学習

から考えさせていきたい。

しかし、子どもは、4年生の時「長方形の面積を求める公式（たて×横）」を作り出していたにもかかわらず、5年生になると「底辺×高さ」「底辺×高さ÷2」「（上底+下底）×高さ÷2」を知識としてだけ使いたがる傾向がみえる。

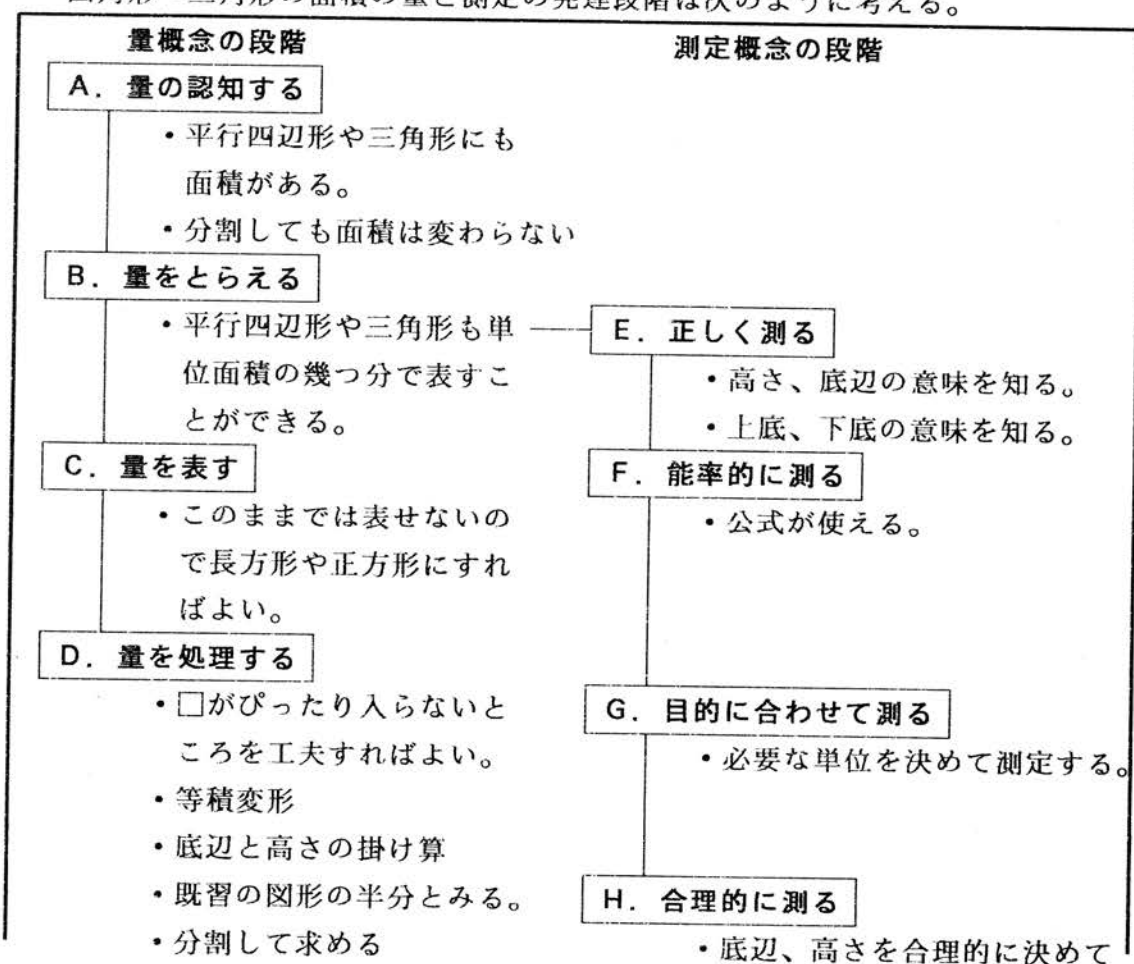
そこで、知識は知識として認めながら、求積公式を創り出す学習を進め、創造する喜び、発見する喜びに気付かせていきたい。

(2) 学習内容のねらい・・・

量と測定の発達段階については量概念と測定概念の二種類あると考える。「量をとらえる」段階にならないと測定の概念は使うのは難しいからである。

この単元では、三角形・四角形での「量を処理する」「合理的に測る」まで一人でも多く到達させていきたい。

四角形・三角形の面積の量と測定の発達段階は次のように考える。



- 底辺×高さで面積を求め
る。(公式化)

- 測定する。
- 一般四角形や多角形を三角形
四角形に分割して測定する。
- 概形をとらえて測定する。

(3) 関心態度のねらい

- 「既習の考えを使えば解決できることがある」という感覚を育てる。また「似ている問題は同じ発想でも解決できる」という感覚を育てる
- 算数が得意でない子どもは、解決の実行でも自信がなく、他に依存したいという気持ちがある。安心感をまず持たせるために、個で解決したこと或いは解決の途中で相談したい子どもは相談させていく。
- 学習の流れは、個人思考→集団思考→個人思考→集団思考→としていく。集団思考の良さ生かす形態は既習のアイデアだけでは自力解決が難しい子どもがいると考えたとき行う。

使用するワークシート

問題	(集団解決 の記録)
(個人解決 の記録)	感想
チェックコーナー	ワクワク度

問題	(集団解決 の記録)
(個人解決 の記録)	感想
	ワクワク度

(4) 児童の実態

① 実態調査

算数のねらいの調査・・・実施しない

内容のねらいの調査・・・量の測定の段階に入れるかどうか調査

周りの長さによって面積が決まると思っているかどうか調査

- SP表作成する。(単元の知識理解、表現処理を網羅している問題を学習前と後に同じ問題を実施する。)

関心態度の調査・・・ソーシャルスキルを含め算数の関心態度は、担任による予想を出発とする。学習を進める中で評価し、助言していく。

② 本単元に関する実態

ア. 量の概念調査・・・四角形・三角形に面積があるか。

イ. SP表・・・・・・単元末テストを使用してプレテスト実施

4. 指導の工夫

(1) 学習形態の工夫

- ① 小規模校であり、施設としてのオープンの特性を生かして、合同学習を進める。
- ② 集団解決の良さを生かした学習（個人解決→進路決定→集団解決）と個人解決の良さを生かした学習（個人解決→集団解決）を組み入れていく。

(2) 学習素材の工夫

本単元では教科書に沿って学習していくため、「よい問題」の要素は十分取り込めないと考える。

(3) 評価の工夫

- ① 量と測定についての事前調査を行う。
- ② SP表を作成する。
- ③ 学習前に予想される反応について、指導者が個人毎に記入しておく。
- ④ WSやチェック表を参考にその時間の指導について反省を行う。

(4) ワークシート（WS）の工夫

- ① WSは冊子化していく。学ばせたい表現処理については、増刷りして配布する。
- ② 集団解決の良さを生かした学習では、個人解決後「進路決定チェック」を行う。

進路先判断チェック表

できた わかった				できない わからない		もうちょっと 自分でやりたい
自信あり		自信ない		できない人 と相談	できた人 と相談	
教えたい	自信ある で相談	自信ない で相談	自信ある へ相談			

(5) 学習環境

- ① ネームカードの使用
- ② 板書は一単位時間の思考の流れが分かるように左から右へ書いていく。
- ③ 学習のまとめを各時間毎に重ねて貼っていく。

5. まとめ

集団思考のよさをパターン化してはいけけない。個人思考のよさの形態と組み合わせることによって、子どもの学習意欲は高く継続すると思われる。また学習が進むにつれ、当初の計画の変更がでてきた。学習指導は生きていると感じた。

主体的思考力を高める授業の創造

～ものづくりの学習を通して～

愛知県春日井市立味美中学校 原田 宗敏

1 主題設定の理由

1年時の木材加工において、生徒一人一人の発想を生かした授業を展開したことにより、教師依存の姿が減少し、主体的に考え、作業を進める姿が多く見られるようになった。また、生徒から『2年生の電気の授業でも木材加工の技能を生かしたい』『オリジナルの作品を作りたい』という声が多く聞かれた。これは木材加工での自信の表れであり、2年時の製作学習への意欲と期待の表れと言える。

新学習指導要領試案においても「体験的な学習や問題解決的な学習」を重視するとともに「生徒の興味・関心を生かした自主的、自発的な学習」が促されるような指導過程の工夫を強調している。

以上のことから、主体的に考え、工夫し創造する能力、そして、実践しようとする意欲的な態度がさらに高められる学習を進める必要があると考え、本テーマを設定した。

2 研究の目標

生徒一人一人が与えられた課題に対し、自ら目標を見つけ、その解決に向けて主体的に取り組むことができる授業を創造する。

3 研究の仮説

授業を展開していく上で

- ① 生徒の意欲を引き出す工夫を加え、
- ② 生徒一人一人を生かすために自らの課題を立てさせ、
- ③ 課題解決能力を育成する学習過程を意図的に設定すれば
生徒に主体的な思考力を身につけさせることができる。

4 研究の方法

仮説を検証するために、下の図のような方法で研究を進めた。

事前調査 …… 生徒の実態を把握する。

仮説 …… 調査をもとに仮説を設定する。

指導計画の作成

領域全体を自己認識、相互認識、自己伸長の3段階で設定した学習過程【仮説③】	
体験的学習内容の充実【仮説①】	課題解決的学習内容の充実【仮説②③】
ケース材料の種類拡大【仮説①②】	蛍光管の種類拡大【仮説①②】

指導法の工夫

目標達成プリントの活用【仮説①】	班を活用した学習の充実【仮説②】
指導案の形式の検討【仮説③】	

授業実践 …… 指導計画に基づいて授業を計画・実践する。

事後調査 …… 仮説検証のためのデータを収集する。

結果と考察・今後の課題 …… 仮説の有効性について考える。

5 研究の内容

(1) 事前調査

2年生90名に対して、電気学習に関する興味・関心、過去の先行経験の実態を把握する目的で調査を実施した。

ア 調査内容と結果 【別紙資料集参照】

イ 考察

以上の結果から、電気機器を扱うことはできるが、そのしくみを知らない生徒がほとんどだった。そのため、簡単な修理でも、難しいと決め込んで手を出そうとしない。これでは電気機器を有効に活用しているとは言えない。また、先行経験があっても、技能的には十分とは言えない。そこで、電気機器の観察の学習から積極的に工具を使わせ、体感的にとらえさせること。そして個のニーズにあった製作学習を展開すること。この2点により学習意欲を高め、持続させることができるのではないかと考えられる。

(2) 指導計画の作成

指導計画の作成にあたって以下の3点に留意した。

- 領域全体を自己認識、相互認識、自己伸長の3段階で設定する。
- 体験的学習内容を充実する。
- 課題解決的な学習内容を充実する。

場面	学習内容	体験的・課題解決的な教材・教具の導入とその意図	時間
自己認識	1. 電気と私たちの生活	1/35 (体験・課題) 家庭にある電気製品 家庭にある電気製品に目を向けさせ、電気製品がどんな材料に変換されているかを調べる。	1
	2. 電気機器の観察	2/35 (体験・課題) はんだごての分解 照明器具の製作でもよく使用する工具であること、電気の流れが把握しやすい電気機器であることから、半田ごての分解を設定し、構成している部品やその役割について調べる。 5・6/35 (体験) 綿飴機の製作 電気に関する基本知識の定着、製作学習への意欲の喚起の場として活用する。	5
相互認識	3. 照明器具 (蛍光灯) の設計	8/35 (課題) グロースタータ式蛍光灯のしくみ 蛍光灯に使われている部品のはたらきと図記号を知り、どのように蛍光管を点灯させるかを理解する。 9/35 (課題) 自分の構想に合った材料及び部品の選択 自分の構想にあったケース材料と蛍光管を選択し、回路図及びスケッチをかく。 10/35 (課題) 製作工程表の作成 加工順序・使用工具について把握しやすくするために行った。	10
	4. 照明器具 (蛍光灯) の製作	13～15/35 (課題) 発泡スチロールによる模型作り 構想が設計要素 (機能・構造等) を十分満たしているか検討するとともに、照明器具の製作が円滑にいくように行う。 17/35～33/35 (課題) 木材を利用した照明器具の製作 主体的に既習の内容 (木材加工、回路学習) を活用・応用する場として行った。 ～20/35 (体験・課題) 組つき標本 組みつぎのけがきを行う上での標本的作用として活用した。	17
自己伸長	5. 電気の有効利用と地球環境	29・30/35 (体験・課題) 配線標本 蛍光灯の配線を行う上での標本的作用として活用する。	1
	6. まとめ	34/35 (課題) ね・ム・ジ 『環境にやさしい生活ガイド』 ね・ム・ジを活用し、環境にやさしい生活の仕方や電気の有効利用について気付かせ、日常生活の中で自分のとるべき行動を考えていく。	1

(3) 指導法の工夫

ア 目標達成プリントの作成

目標達成プリントの作成にあたって以下の2点に留意した。

- 学習目標、目標達成のためのステップを記入できること。
- 1時間毎の授業の反省ができ、次時への意欲を高めること。

電気学習 (7/35)	
月 日 () 曜	2、電気機器の観察
【学習課題】 電気を光に変換する機器について調べよう	
【学習目標】 <div style="border: 1px solid black; height: 20px; width: 100%;"></div>	
学習目標を達成するためには <div style="border: 1px dashed black; width: 100%; height: 20px;"></div> とよいと思う。	
【今日の授業で気付いたことや感想をまとめよう】 <div style="border: 1px solid black; height: 60px; width: 100%;"></div>	
【自己評価】	
具体的な学習目標を立てることができたか。	A B C D
具体的な目標を達成するために意欲的に学習を進めることができたか。	A B C D
学習目標を達成することができたか。	A B C D

←どのような方法を使えば学習目標を達成できるかを考え、手順を記述する。

課題を解決する力

←見通しを持って実践してみて、気付いたこと分かったことなどを自由記述する。

←今日の授業の感想を記述する。

次時への意欲・ステップとなる力

イ 班を活用した学習の充実

自己認識、相互認識、自己伸長の学習課程で、自分の考えをまとめ、発表し、他の意見を尊重する態度の育成は、自己伸長にとって不可欠である。班を活用した学習は、相互活動がその基であり、この活動を通して求める態度の育成が可能と考える。そこで以下のように班を編成して実践することとした。

- 班毎均質班・電気と私たちの生活から照明器具の設計（構想図）まで
- 同一目的班・照明器具の設計（模型製作）から電気の有効利用と地球環境まで
- ウ 指導案の検討

「個」の持ち味を発揮することをねらいとして、4つの場面を設定した学習過程を基本とした。このことにより、生徒一人一人に応じた複線型の授業の展開が可能となる。

場面	内容
自己認識	「つかむ」 教師の提示した学習課題に対して「ここまで頑張ろう。」「こんなものにしたい。」といった学習目標をもつ段階。
相互認識	「見通す」 自分の目標を達成するために、「この方法で進めていけば解決できそうだ。」といった見通しを確立させる段階。
	「行う」 見通しに沿って実践を進める段階。ここまでは、教師は必要と思われる題材や教材をあらかじめ用意しておく必要がある。 個別指導も積極的に行う必要がある。
自己伸長	「分かる・できる」 お互いの学習の成果を全体の出し合うことにより、共通点や相違点を明らかにさせていく段階。このことにより、生徒は自分と違う考え方や進め方を知り、お互い認め合いながら課題の解決を図っていく段階。

(4) 授業実践

この実践では、以下の3名の生徒に注目して全体の把握に努めた。

- <A男> 1年時の木材加工では満足のいく作品を仕上げることができ、故障した電気機器の修理など先行経験豊富で、電気学習への興味関心が高い。
- <B男> 1年時の木材加工では満足のいく作品を仕上げることができ、木材加工の技能は中位であるが、蛍光灯の取りかえ程度の先行経験しかなく、電気学習にそれほど興味を示さない。
- <C子> 1年時の木材加工ではあまり満足のいく作品ができず、蛍光灯の取りかえ程度の先行経験も全くなく、電気学習にそれほど興味を示さない。

ア 授業実践1-半田ごての分解

(7) 抽出生徒の授業の感想

<A男>

【今日の授業の感想をまとめよう】

家にも半田ごてがあるがこんなしくみになっているとは知らなかった。家で使っている半田ごてはスイッチがないので僕は熱エネルギーをムダにしていると思う。電気を大切にすするためにはどうしたらいいかもう一度考えたほうがいいと思う。電熱機器の場合、火事になったりすることもあるので安全には十分気をつけて利用しなければいけないと思う。

(1) 考察

A男とB男は学習の目標、見通しを自分で設定することができたのに対して、C子は周囲の意見を参考にし、援助を受けながら設定した。半田ごての分解は3人とも興味を示し、班員と協力し、ドライバーを使って積極的に分解していた。分解後、A男は、どのように電気が流れていくのか、それぞれの部品がどのような役割を果たしているのか班の中心となって話し合いを進めていた。B男は、『それぞれの部品が電気を通す部品か電気を通さ

ない部品かを区別してから電気の流れについて考えるとよい』ということを経験の中で提案し、話し合いに参加していた。C子は、話し合いに最初はなかなか参加することができなかったが、発熱体を観察し、『もしかしたらこれが電気エネルギーを熱エネルギーに変換しているのでは』ということを経験員に話していた。半田ごてを分解させたことにより、各部の名称やはたらきが把握しやすかったとの声が多く聞かれた。全体として、困ったことに対して教科書、資料集などを参考にしながら課題を解決していた。授業後の感想の中でA男は、電熱器具を使用する時の安全性のことについて書いている。半田ごての扱い方について自ら考えることができたのは、製作学習において生かすことができ、非常に評価できる。

イ 授業実践2－綿飴機の製作（2時間完了）

(7) 抽出生徒の授業の感想

<B男>

最初は、空き缶を使って綿飴機を作ろうか作れるのかなと思って、いざいざ
空き缶に「カビョウ」で穴をぬけたらアルゴリズムでぬけたり、するこで
綿飴機を作れると言うことにはとてもびっくりした。ここでも前の時間に
ならった電源、負荷、スイッチ、導線でこまめにこまめにこまめにこまめに

(1) 考察

ほとんどの生徒が初めて空き缶を使って綿飴機を作ることによって非常に興味を示していた。また、綿飴機に必要な部品・作り方について目標達成プリントを使い、どの班も順調に話し合いを進めていた。

A男は、家にも半田ごてがあるということから、それぞれの部品への半田付けを意欲的に行っていた。B男も家庭で父親が半田付けをしている姿を見て、一度経験してみたいということで一部の部品の半田付けにチャレンジしていた。C子は手先にあまり自信がないことから、最初は画鋸を使って空き缶への穴あけを行い、半田付けにはチャレンジしようとしなかった。しかし、班員の一人が上手に半田付けをしている姿を見て自分もやってみようという気持ちが出てきた。そして、一つの部品への半田付けを行ったが、なかなか上手くできず意欲が少し減少していたので、教師の方からやり方を資料集で確認してからもう一度行うよう助言した。その結果C子も上手に半田付けを行うことができ、『先生、半田付けの仕方を資料集で勉強してからやったら上手くできたよ』と嬉しそうに話してくれた。上手く工具を扱えない生徒への教師の支援・助言が生徒の意欲の増加に繋がることを改めて痛感した。また、B男の授業後の感想にあるように、綿飴機を作って、綿飴を食べるということに終止せず、綿飴機にも電気回路を構成する電源、負荷、スイッチ、導線があるということをおさえることができたと考えられる。

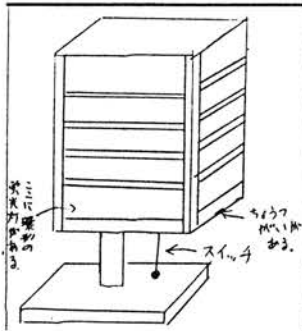
ウ 授業実践3－グロースタート式蛍光灯

最初の課題であるグロースタート式蛍光灯に使われる電気・電子部品についての調べ学習では、教科書や資料集を使ってスムーズに学習を進めていた。第2の課題である直管形の回路図を見て、実体配線図を完成させるという課題については、A男とB男は回路図を読み取り完成させたのに対し、C子は教科書を使って完成させた。第3の課題である環形・ツイン形の回路図を完成させるという課題については、B男は『蛍光灯の形が変わっても同じ電気・電子部品が使われている』ということに気づき、自分自身の力で完成させることができた。A男の班は、まず教科書や資料集で調べたが掲載されていないため、何とか自分たちの力で完成させようと試行錯誤しながら課題に取り組んでいた。しかし、うまく

いかなかったので、教師の方から『蛍光灯の形が違ってても、使われている部品は変わってないよね』という助言を与えたところ、何とか完成させることができた。C子は、環形・ツイン形の回路図が掲載されていないためあきらめてしまい、結局教師の支援や班員の手助けを受けながら何とか完成させた。この授業を通してB男は回路図をかいたり、読みだすことに自信を持ち、自分の力を信じて課題を解決しようという姿勢が生まれてきたようである。

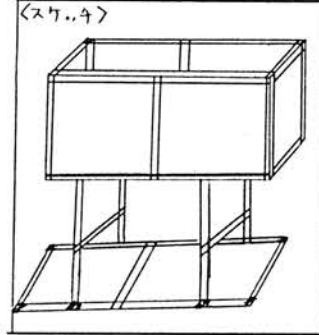
エ 授業実践4－構想のまとめ

(7) 抽出生徒のスケッチ



<A男>

(1) 考察



<B男>



<C子>

それぞれが光を通しやすい構造にしようと工夫を凝らすことができた。電気機器の修理などの先行経験が豊富な生徒は、修理をするためにはどんな工夫をすればよいか考えることができたのに対し、先行経験が乏しい生徒は、故障した時のことまで考えることができなかった。しかし、一部の先行経験が乏しい生徒は、班員のスケッチを見て、『故障したときに直せるような形にしなくては』といった自分の構想の修正部分を見つける場面も見られた。今後の模型製作においても、修理しやすい構造の工夫が彼らに見られると確信している。また、「使い捨て時代」といわれる今日、できるだけ自分で修理して使おうという気持ちが今回の学習を通して少しでも高まればと期待している。

オ 授業実践5－模型製作（3時間完了）

(7) 抽出生徒の授業の感想

<B男>

実際に作ってみていろいろな問題が出てきた。模型製作をする前までは安定器やクヒコークを構材に取り付けようと思っていたけれど、実際模型を作ってみて無理だということに気がついた。今の形だと故障したときに直せないから、直せる形に工夫しなくてはいけないということも気がついた。こういった問題点を直せばいい作品ができると思う。

<C子>

「C子の時は、すごくかんたんにかいていたけど、
 改めてみると、けっこうむずかしかった。特にキティの顔
 の部分の形が合わなかった。そこで、
 スケッチでイメージしていたものは、
 模型で、1つはもうすぐできあがりだったので本番では
 失敗しないように、よく考えてから、やりたくて使います。」

(1) 考察

模型製作後、A男は、作品上部が不安定であることに気づき、本製作に向けて形を改良していた。C子は、部品の大さを考えていない配置、修理しやすくするために接合面で工夫が必要なことに気付いた。

1年時に、木材で作るということをイメージした模型製作を経験しているため、模型に繊維方向をかき込む姿が多く見られた。1年時の学習を生かし、木材の性質を意識した模型製作ができたことは非常に評価できる。また、模型製作前に『修理できる構造にする』ということに気付いた約30%の生徒は、1年時にちょうつがいや磁石などを使用したことを思い出し、これらを活用した作品に仕上げることができた。一方、B男とC子を含む約70%の生徒は、故障した時に直せる構造の作品にすることはできなかった。しかし、多くの生徒は、B男の感想に見られるような、模型製作を通して『いろいろな問題が出てきた』と書いていた。そして、模型製作後の個人の発表により、『修理できる作品にしなければ』、『ちょうつがいや磁石などを使えばいいのか』といった照明器具の本製作への見通しがついた。

以上のことより、模型製作を通じて「この問題点を修正しよう」という目標設定する力、「どういう方法を使えば解決できるか」という見通す力が更に育ったと考える。また、そのことが「さらに良い作品にしよう」といった生徒一人一人の意欲の増加に繋がり、毎時毎時に見通す訓練を行わせれば主体的思考力が高まると考えられる。

カ 実践6-部品の取り付けと配線 (3時間完了)

(7) 抽出生徒の授業の目標達成プリント

<A男>

<p><注意点> → 環形 フルスイッチ ・安定器のはんだ付けのとき 予備はんだをしておくと配線 しやすい。 ・はんだ付けをするとき 別のコードを こぼさないようにする ・コードをまちがえないように色を 確認する。</p>	<p><感想> 予備はんだの量が少なかったので 安定器の配線に時間がかかった。 環形のソケットをとりつけるとき穴あけが おれてしまい、はじめはうまくいかなかったが なんとかうまくいった。初めて自分で照明 器具の配線をして電気がついたときは とてもうれしかった。</p>
--	--

<B男>

<p><注意点> ・安定器などはのはんだ付けのときは 予備はんだをしておく配線しやすい。 ・ソケットのコードの色をかえり配線を まちがえない。 ・部品において、ねじの種類をかえる。</p>	<p><感想> 半田付けは2年生の授業で初め てやったけれど、父親が趣味で半田付けを している姿を普段よく見ているので、使いは ず少なかった。 コードの色をかえり配線 するのは、回路図を見ながら 色をまちがえないように 配線することができた。</p>
---	--

<C子>

<p><注意点></p> <p>安定器の半田付けをする時 よみ半田をいっしょくたにいっ ニールスイッチを使った。 (半田形がけと...) 安定器を取り付ける時 ネジを短いネジで付けた。</p>	<p>感想</p> <p>配線が難しかったけれど先生が 親切に教えてくれたので早くできた。 配線は終わったがコードが部品 にからんでしまったのでそこだけ 切って配線をやりました。難しかった けれど回路図のプリントを見ておぼろげなところ</p>
--	---

(4) 考察

三人とも学習目標の設定にも慣れ、時間内に決め、また、学習の見通しをする場面においても、それぞれの解決方法を既習の目標達成プリントや資料集などを用いて目標達成の手法を導き、話し合いに積極的に参加していた。そして、それぞれの見通しに従って作業を進めることができるようになった。

C子の感想にもあるように教師の支援あるいは賞賛が学習意欲の増加に繋がるということを実感すると同時に、教師のきめ細かい机間観察とタイミングをみはかった適切な言葉かけの大切さを実感した。

全体においても、困ったことに対して自ら課題を解決していく姿が多く見られた。例えば、最初安定器とコードとの半田付けはどの生徒も四苦八苦する姿が多く見られたが、3人の目標達成プリントにもあるように教科書、資料集を参考にし、「予備半田をする」という解決方法を見出すことができた。また、1年時の製作学習では、『工具の使い方を教科書で勉強してからやればよかった』と完成後反省している生徒もいたが、今回は、キリの使い分けなど工具についての確認を自ら行う姿も多く見られた。ここでも1年時の木材加工の反省が生かされており、評価できる。

(5) 事後調査

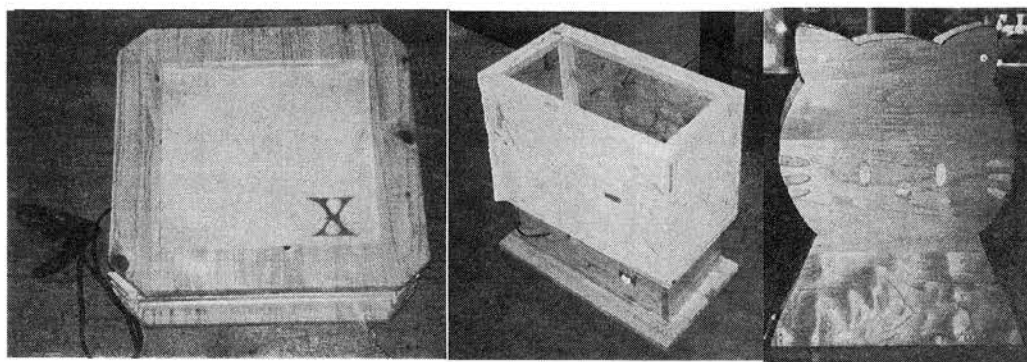
ア 調査内容と結果 【別紙資料集参照】

イ 考察

調査対象は事前調査と同一とした。その結果から、男女ともに学習意欲が増し、「作品に満足している」との回答も多く、課題に対して自力で解決の手法を考える姿勢がうかがえた。また、限定する条件をなるべく少なくし、一人一人が使いたい蛍光管やケース材料を選ばせ、各々が考えた加工法を行わせたことにより独創的な作品が多く見られた。また、体験的・課題解決的学習を支援する教材・教具の活用により基礎的技術・技能を定着させ、上位体験へ発展させることができた。

6 結果と考察・今後の課題

C子は、模型製作においてあまり工夫を凝らした作品を仕上げることができなかった。しかし、模型製作を行ったことにより、自分の考えた構想図の改善点を見出すことができ、本製作への見通しがつき、構造面での工夫を凝らし納得のいく作品を仕上げることができた。B男は、構想の修正についての話し合い活動により、電気・電子部品の配置と故障時に修理できる構造といった問題点を解決した作品を仕上げることができた。以下の写真に示すように、それぞれが工夫を凝らすことができた。



<A男>

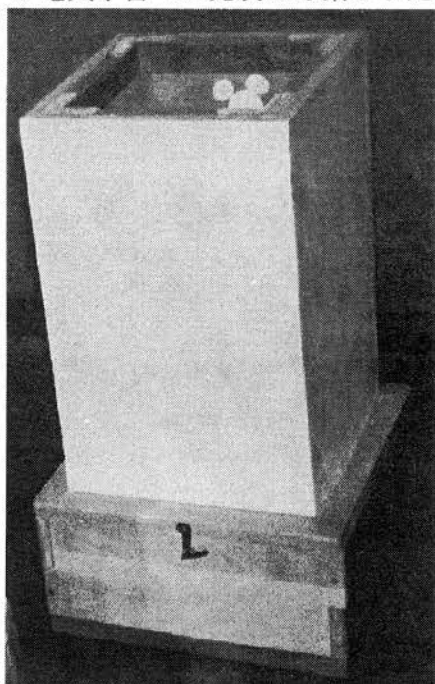
<B男>

<C子>

【抽出生徒の作品】

学習過程の充実により、生徒一人一人が自己認識を深め、相互認識を図り、自己伸長につなげることができた。

体験的・課題解決的学習内容の導入により、基礎的な技術・技能を身につけ、失敗した経験から学んだことを深化、発展させたりするなど、生徒自ら主体的に解決していこうとする姿が多く見られた。また、電気・電子部品の取り替え、半田付け等がしやすいようにちょうつがいや木ねじを利用したり、丈夫なケースになるようにいろいろな部分で組みつぎや補強金具を使うなど、木材加工での学習が電気学習への発展にも繋がった。



【補強金具を使用した作品】

<電気の授業を通しての感想>

僕はこの1年間、電気の実験を通していろいろなことを学びました。僕が一番に覚えたことは、自分で目標と定め、目標を達成するにはどうするかを自分で考えたことだ。そしてその目標を達成するために「がんばってできた」と思います。一番うれしかったことは、照明器具のようかんが一つとりました。1年間かけた、つくってまで、本当によかったです。当然のことながら、いろいろと失敗はあったけれど、それもまた学びの機会になったと思います。また、いろいろな部品を交換したり、半田付けをしたり、木ねじやちょうつがいなど、木材加工での学習が電気学習への発展にも繋がったと思います。1年という長い時間がめくれたのは、時間的にはとてもよかったです。それに、人に教えることもできるとは思っていないけれど、完成したときはとてもうれしかったです。これからも、いろいろなことを学びたいです。電気の有効利用の授業では、コンデンサやコイルを使って、調子がいいように、いろいろな電気の部品を使って、いろいろと試してみたいです。回路図や配線図がわかると、もっといろいろと試してみたいです。とても楽しく授業ができました。ありがとうございました。

<A男の感想>

目標達成プリントの活用により、生徒一人一人が学習目標の達成に向けた見通しを明確に持ち、直面した問題点にも既習の目標達成プリントを参考に学習をフィードバックさせながら解決を図る姿が多く見られた。また、感想を記入する欄や自己評価を設け活用させたことにより、成就感、次時への課題意識を持たせ、興味関心を持続させることができた。また、自己評価項目を設定したことにより、生徒に学習の主体者としての自覚を促し、自発的に目標の達成に努力しようとする意欲を向上させることができた。

班を活用した学習の充実により、全体の間では、自信がなくて発言できない生徒も、少人数の班の中では気付いたことを話したり、友達の意見を取り入れ自分の意見を修正するなどの姿勢が見られ、学習に膨らみを持たせることができた。

以上のように、生徒一人一人の発想を生かした授業を展開したことにより、生徒一人一人が独自の発想を生かし、主体的に考え、作業を進める姿が多く見られるようになった。以上の結果から本研究で設定した仮説は妥当であったと考えられる。

実践を通して以下の4点が今後の課題としてあげられる。

- 生徒の思考を更に援助し、効率よく作業を進めることができる目標達成プリントの改善。
- 学習速度の差、既習の技術・技能の差など生徒一人一人の個性に留意した支援の方法の更なる追究。
- 自己評価、相互評価、教師からのアドバイスにより、自己評価能力をより確かなものにしていく方法の工夫。
- 次年度、3年生選択技術でのセンサー付き蛍光灯への発展。

主体的思考力を育てる授業の創造
～技術・家庭科のものづくりの学習を通して～

資料集

愛知県春日井市立味美中学校

原田宗敏

目標達成プリント

6月8日(水) 電気の学習 (5, 6 / 35)
2. 電気機器の観察

【学習課題】 掃除機を製作しよう

【学習目標】 掃除機の構造を知ろう!

学習目標を達成するためには
先生の話を参考にするとよいと思う。

①掃除機は、電気エネルギーを何エネルギーに変換したものでか。(動力) エネルギー
②必要な部品を考えよう。
空き缶(空き缶)、乾電池、電池ケース、歯輪、木片、たわ、歯金
2本、アルミ、股ボール線(アルミはくも内側に貼った)、(フレキシブル) (テープ)。
③掃除機の作り方を考え、掃除機をつくろう。
＜方法＞
①(木片)と電池ケースを木片に接続する。
②歯輪をつくる。
(1)空き缶の側面を(竹筒)で小さな穴をたくさんあける。
(2)空き缶の上側に穴をあけ、木片、たわ、歯金を取り付ける。
③木片と(歯輪)をフレキシブルでつなげる。
④回転体の中に(歯輪)を入れ、股ボール線の中で、回転体を回転させながら、(フレキシブル)で回転体を加熱する。
今日の授業の感想をまとめよう

掃除機の作り方が分かったので、全クラスで協力して掃除機を作ってみようと思う。フレキシブルの裏側にアルミテープを貼るのもいいと思う。少ししてこの掃除機が完成すると思います。バッチリです。これからは掃除機も作りたいです。

自己評価
具体的な学習目標を立てることができたか。 A () B () C () D ()
具体的な目標を達成するために意欲的に学習を進めることができたか。 A () B () C () D ()
学習目標を達成することができたか。 A () B () C () D ()

2年 組 名

6月3日(水) 電気学習 (7 / 35)
2. 電気機器の観察

【学習課題】 電気を変換する機器について調べよう

【学習目標】 自然電球や蛍光灯のしくみについて調べよう。

学習目標を達成するためには
教科書や資料集を参考にするとよいと思う。

【今日の授業で気付いたことや感想をまとめよう】

＜自然電球の発光のしくみ＞
①場所の比較
・自然電球はトビやガラス管でつくられている。
・蛍光灯はガラス管と自分の部屋で使われている。
②発光のしくみ
・自然電球・・・発熱作用
・蛍光灯・・・放電現象
＜感想＞5月30日の授業で自然電球のしくみについて調べた。自然電球はトビやガラス管でつくられている。蛍光灯はガラス管と自分の部屋で使われている。自然電球は発熱作用で光る。蛍光灯は放電現象で光る。自然電球は発熱作用で光る。蛍光灯は放電現象で光る。

自己評価
具体的な学習目標を立てることができたか。 A () B () C () D ()
具体的な目標を達成するために意欲的に学習を進めることができたか。 A () B () C () D ()
学習目標を達成することができたか。 A () B () C () D ()

2年 組 名

6月9日(木) 電気学習 (9~10 / 35)
3. 照明器具(蛍光灯)の設計

【学習課題】 構想を達めスケッチに表そう

【学習目標】 作りたい作品を決め、スケッチに表そう

学習目標を達成するためには
作りたい作品を参考にするとよいと思う。

①機能(はたらき)について
(1)使用目的
夜間作業の時のための。
(2)使用条件(誰が、どのように、どんな場所で)
私が自分の部屋で使う。

②回路設計について
(1)使用目的、使用条件にあった部品の選択

回路の構成	部品
電源	交流電源
負荷	蛍光灯(電球)
スイッチ	プルスイッチ
制御	ヒューズ
その他	変圧器 コンデンサ テロランプ

(2)回路図

自己評価
具体的な学習目標を立てることができたか。 A () B () C () D ()
具体的な目標を達成するために意欲的に学習を進めることができたか。 A () B () C () D ()
学習目標を達成することができたか。 A () B () C () D ()

2年 組 名

④ケースの材料

作り方。

作業内容	手工具、機械
切り取り	はさみ
接着	接着剤
組立	ドリル
仕上げ	ヤリ
塗装	塗料

【今日の授業の感想をまとめようスケッチ】

＜感想＞回路図を見直すと、スイッチの位置をもう少し変えてみる。部品ももう少し変えてみる。スイッチの位置をもう少し変えてみる。部品ももう少し変えてみる。

自己評価
具体的な学習目標を立てることができたか。 A () B () C () D ()
具体的な目標を達成するために意欲的に学習を進めることができたか。 A () B () C () D ()
学習目標を達成することができたか。 A () B () C () D ()

2年 組 名

電気の学習 (13~16/35)
3. 照明器具 (電光灯) のケースの設計

【学習課題】
模型製作をしよう。

【学習目標】
直管形電光灯を使った照明器具を製作しよう。

学習目標を達成するためには
電光灯の長さを調べてから作る とよいと思う。

【自分で考えたことやグループ・学級全体で話し合ったことをまとめる。】
 模型で確かめたいところはないか、他人のアイデアで参考にできるところはないか。
 直管形電光灯の長さを調べてから作る。直管形電光灯の長さを調べてから作る。直管形電光灯の長さを調べてから作る。
 今日授業の感想をまとめるよう。

【自己評価】
 具体的な学習目標を立てることができたか。 A B C D
 具体的な目標を達成するために意欲的に学習を進めることができたか。 A B C D
 学習目標を達成することができたか。 A B C D

2年 組 番 名前

電気の学習 (17~18/35)
3. 照明器具 (電光灯) のケースの設計

【学習課題】
模型の修正をしよう。

【学習目標】
丈夫な構造にしよう。

学習目標を達成するためには
糸ひきつなぎを3つ用いる とよいと思う。

【自分で考えたことやグループ・学級全体で話し合ったことをまとめる。】
 製作した模型の検討 (構造、加工上の問題点)
 ・糸ひきつなぎが壊れ、壊れてから使う。長さを調節して使う。
 ・糸ひきつなぎを壊れるように使う。糸ひきつなぎを壊れるように使う。
 ・糸ひきつなぎの長さを調節して使う。糸ひきつなぎの長さを調節して使う。
 今日授業の感想をまとめるよう。

【自己評価】
 具体的な学習目標を立てることができたか。 A B C D
 具体的な目標を達成するために意欲的に学習を進めることができたか。 A B C D
 学習目標を達成することができたか。 A B C D

2年 組 番 名前

電気の学習 (19~22/35)
4. 照明器具 (電光灯) の製作

【学習課題】
ケースのけがきをしよう

【学習目標】
ケースのけがきをしよう

学習目標を達成するためには
ケースのけがきをしよう。ケースのけがきをしよう。ケースのけがきをしよう。 とよいと思う。

【自分で考えたことやグループ・学級全体で話し合ったことをまとめる。】
 今日授業で気付いたことや感想をまとめるよう。

【自己評価】
 具体的な学習目標を立てることができたか。 A B C D
 具体的な目標を達成するために意欲的に学習を進めることができたか。 A B C D
 学習目標を達成することができたか。 A B C D

2年 組 番 名前

電気の学習 (23~25/35)
4. 照明器具 (電光灯) の製作

【学習課題】
ケースの組み立てをしよう

【学習目標】
ケースの組み立てをしよう

学習目標を達成するためには
ケースの組み立てをしよう。ケースの組み立てをしよう。ケースの組み立てをしよう。 とよいと思う。

【自分で考えたことやグループ・学級全体で話し合ったことをまとめる。】
 今日授業で気付いたことや感想をまとめるよう。

【自己評価】
 具体的な学習目標を立てることができたか。 A B C D
 具体的な目標を達成するために意欲的に学習を進めることができたか。 A B C D
 学習目標を達成することができたか。 A B C D

2年 組 番 名前

電気の学習 (26~31/35)
4. 照明器具 (電光灯) の製作

【学習課題】
部品を取り付けと配線をしよう

【学習目標】
部品を取り付けと配線をしよう

学習目標を達成するためには
部品を取り付けと配線をしよう。部品を取り付けと配線をしよう。部品を取り付けと配線をしよう。 とよいと思う。

【自分で考えたことやグループ・学級全体で話し合ったことをまとめる。】
 今日授業で気付いたことや感想をまとめるよう。

【自己評価】
 具体的な学習目標を立てることができたか。 A B C D
 具体的な目標を達成するために意欲的に学習を進めることができたか。 A B C D
 学習目標を達成することができたか。 A B C D

2年 組 番 名前

電気の学習 (32~33/35)
4. 照明器具 (電光灯) の製作

【学習課題】
電気の有効利用と地球環境を考えよう

【学習目標】
電気の有効利用と地球環境を考えよう

学習目標を達成するためには
電気の有効利用と地球環境を考えよう。電気の有効利用と地球環境を考えよう。電気の有効利用と地球環境を考えよう。 とよいと思う。

【自分で考えたことやグループ・学級全体で話し合ったことをまとめる。】
 今日授業で気付いたことや感想をまとめるよう。

【自己評価】
 具体的な学習目標を立てることができたか。 A B C D
 具体的な目標を達成するために意欲的に学習を進めることができたか。 A B C D
 学習目標を達成することができたか。 A B C D

2年 組 番 名前

事前・事後調査結果

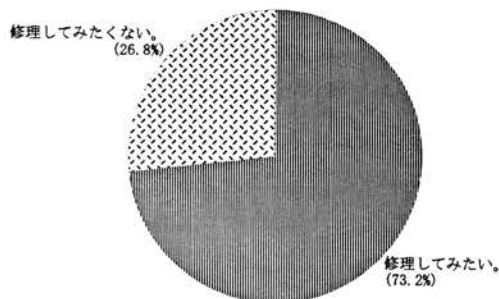
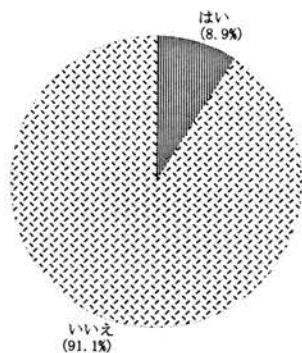
[Q2-1] 故障した電気機器を修理したこと [Q2-3] Q2-1で2.いいえと答えた人のみ
 がありますか。 答えて下さい。自分で修理して使
 おうとは思いませんでしたか。

< 事前調査より >

< 事前調査より >

調査項目	全体
はい	8
いいえ	82

調査項目	全体
修理してみたい。	60
修理してみたくない。	22



[Q3-3] Q3-1で1.はいと答えた人に聞き
 ます。自分で製作した電気機器を
 今でも使っていますか。

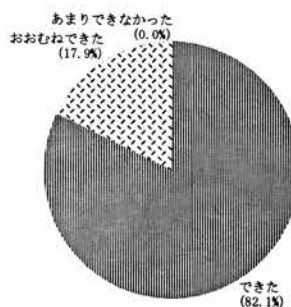
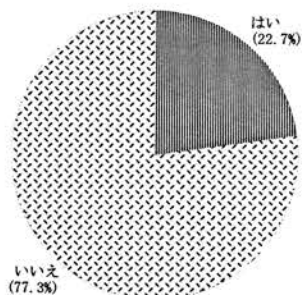
< 事前調査より >

4. 目標達成プリントによって学習の
 見通しを持つことができましたか。

< 事後調査より >

調査項目	全体
はい	15
いいえ	51

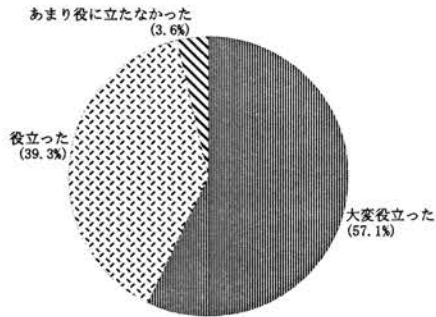
調査結果	全体
できた	74
おおむねできた	16
あまりできなかった	0



6. グループ学習は自分の考えを広げるために役立ちましたか。

<事後調査より>

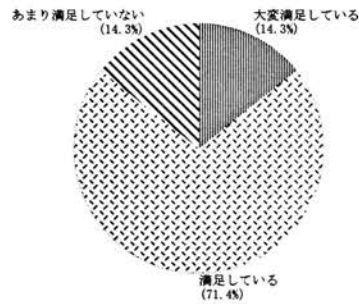
調査結果	全体
大変役立った	51
役立った	35
あまり役に立たなかった	4



9. 作品に満足していますか。

<事後調査より>

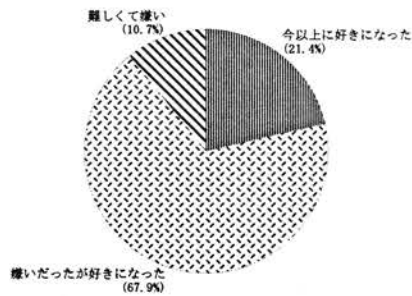
調査結果	全体
大変満足している	13
満足している	64
あまり満足していない	13



10. ものづくりの授業を通してあなたの気持ちが変わりましたか。

<事後調査より>

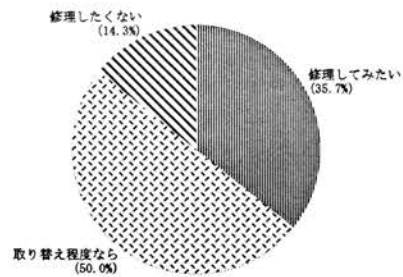
調査結果	全体
今以上に好きになった	19
嫌いだったが好きになった	61
難しくて嫌い	10



11. 今後、故障した電気機器を修理してみたいと思いますか。

<事後調査より>

調査結果	全体
修理してみたい	32
取り替え程度なら	45
修理したくない	13



<事前調査> 電気学習に関する先行経験アンケート

2年 男・女

- 【Q1】 自分で蛍光灯や白熱電球の取りかえをしたことがありますか。
- 【Q2-1】 故障した電気機器を修理したことがありますか。
- 【Q2-2】 Q2-1 で 1.はいと答えた人のみ答えて下さい。自分で修理した電気機器と修理内容、修理時使用した工具を答えなさい。
- 【Q2-3】 Q2-1 で 2.いいえと答えた人のみ答えて下さい。自分で修理して使おうとは思いませんでしたか。
- 【Q3-1】 自分で電気製品を作ったことがありますか。
- 【Q3-2】 Q3-1 で 1.はいと答えた人に聞きます。自分で製作した電気機器と使用した工具を答えてください。
- 【Q3-3】 Q3-1 で 1.はいと答えた人に聞きます。自分で製作した電気機器を今でも使っていますか。
- 【Q4】 今後、電気機器を作ってみたいと思いますか。
- 【Q5】 次の工具の使用経験はありますか。
- 【Q5-1】 半田ごて
- 【Q5-2】 ラジオペンチ
- 【Q5-3】 ニッパ
- 【Q5-4】 ワイヤストリッパ

<事後調査> 電気学習を終えて

2年 男・女

1. 学習課題から学習目標を立てることができましたか。
2. 学習目標を達成するために努力しましたか。
3. 自分で決めた学習目標を達成することができましたか。
4. 目標達成プリントによって学習の見通しを持つことができましたか。
5. 学習したことを自己評価して次の授業への目標が持てましたか。
6. グループ学習は自分の考えを広げるために役立ちましたか。
7. 模型製作は、構想図の問題点を発見し、修正するのに役立ちましたか。
8. のこぎりびき、かんながけなど木工具の使い方が1年時より上手にできるようになりましたか。
9. 作品に満足していますか。
10. ものづくりの授業を通してあなたの気持ちが変わりましたか。
11. 今後、故障した電気機器を修理してみたいと思いますか。

個々の生徒の発想を生かした 授業展開の工夫

東京都杉並区立東田中学校
数学科教諭 下斗米 八穂

◇ はじめに

この春より、縁があってバズ学習研究会に参加させていただくことができました。

日ごろより、生徒の個々の意欲や考えとその交流を授業展開に生かしたいと考えておりましたので、今後とも勉強させていただきたいと考えております。

今回は、現在行っている授業の中に、バズ学習との関連性を探し、報告させていただきます。この程度ですと、皆様実践なさっていることと思いますが、今回の研究会の討議材料にいただければ幸いです。

よろしくご指導ください。

1. 主題設定の理由

教室における一斉授業にみられるような『集団学習』においては、様々な長所と短所が考えられる。

『集団学習』の短所の1つとして、一斉教授であるが故の『個』の埋没の恐れがある。生徒にとって受け身の授業が続いては、生徒は自分の考えが生きず、知識の埋め込みばかりの授業にもなりかねない。

そこで、一人一人が主体的に授業に参加するため、個々の生徒の考えを授業の軸にしていくことをめざした。生徒自身の思考力が、知識の構築の段階は元より、学んだ知識の活用段階に生きることを実感させ、次の学習の興味や関心につなげていきたい。学習が進むにつれ、数学の学習体系が、自分の発想の積み重ねとして形成されていく実感は、喜びであろう。

そのために、生徒個々の自由な発想を表現する場面の設定を、授業の展開に工夫する必要を感じた。

また、『集団学習』の長所の1つとして、互いの発想を交流させることによる成果を重視したい。互いに主張し合うことで、個人の発想の枠を超えた、様々な角度から視点を持つことが可能になる。視野を広げ、発想の可能性を広げることもできる。

さらに、多くの情報を収集し、数ある中から必要な情報を選択する能力も合わせて養いたい。選択する過程で、新たな発想の余地も生まれる。

これらの表裏一体の短所と長所に関して、短所を補い、長所を生かす授業展開をめざし、上記の主題を設定した。

2. 目標と観点・注意点

授業の展開の中で、『個々の発想が生きていること』を、めざす。

その達成には、自分の発想が全体で認められ、その発展した成果として学習内容が得ら

れたという実感を、生徒本人が実感できることが重要である。

これは、まず、『① 自分の発想を持つこと』から始まる。そのためには、基本的な知識や技術を習得することと、テーマに興味・関心を持つことが必要である。意欲を持って、既習内容を活用して、発想できるように、前段階の授業からの流れのある計画も大きな意味を持つ。

次に、交流の基本は、『② 自分の発想を他者に伝えること、そして自分とは異なる他者の意見を認め、新たな自分の意見を持つこと』にある。

しかし、これらには挙手の苦手な生徒も意見を反映させられる反面、日常の人間関係によって、逆に発想を主張できない場面も心配される。教員の机間巡視で補いたいところである。

さらに、主張したり、交流の中から生まれた『③ 発想が授業に役立つ』ことで、達成感や充実感を味わうことができる。この思いこそが、学習への自信と、次の単元の意欲につながるのである。

以上3点で、主題に沿った授業の展開を工夫し、その成否を測りたいものである。

3. 授業の展開例

① 範囲

第2学年 単元名 平面図形（三角形と四角形）

節 名 平行四辺形

項 名 平行四辺形になるための条件

② 指導のねらい

平行四辺形は、平面図形の中でも興味深い性質を持つ四角形であり、今後も図形の学習において基本的な図形として活用される図形である。

その平行四辺形を題材として、演繹的な推論によって図形の性質を調べていくことの意味や方法に関心を持ち、理解できるようになることをめざす。また、定義や定理の意味、仮定と結論を明らかにして証明することの意味を理解し、証明を記述することができるようになることをめざす。

この項では、既習の「平行四辺形の性質」の項にて取り組んだ平行四辺形を、性質とは逆の、条件という点から考え、証明し、定理としてまとめ、活用する過程で理解を深める。

③ 前時までに学習している既習内容

コンパス・三角定規の活用方法（角を移す作図方法）

図形の証明の記述

三角形の合同条件・平行線の性質と条件

平行四辺形の定義（2組の対辺がそれぞれ平行な四角形）

④ 本項の展開（全4時間）

第1時	導入 平行四辺形の作成 <ul style="list-style-type: none"> 平行四辺りのかき方を募集する プリントに、定義以外の方法で作図する。 	(プリント1) 【※】
第2時	検証[2][3] → 証明[2][3] <ul style="list-style-type: none"> プリント2の配布 それぞれの四角形が、平行四辺形であるかどうかを検討する →理由を発表する [2][3]が平行四辺形になることを証明する 	(プリント2) 【※】
第3時	検証[4][5]→証明[4][5]、まとめ <ul style="list-style-type: none"> 前時の続きとして、 [4][5]が平行四辺形になることを証明する 平行四辺形になるための条件 <ul style="list-style-type: none"> [1] 2組の対辺が、それぞれ平行な四角形 [2] 2組の対辺は、それぞれ等しい四角形 [3] 2組の対角が、それぞれ等しい四角形 [4] 2本の対角線が、各々の中点で交わる四角形 [5] 1組の対辺が平行で、その長さが等しい四角形 をノートにまとめる。	(プリント2)
第4時	比較[5]、応用 <ul style="list-style-type: none"> [5] 1組の対辺が平行で、もう1組の対辺が等しい四角形が条件にならないことを検討する 直接条件にならなかった作図方法（自分の作図とプリント2の裏面）が、どの条件にあてはまるかを検討（証明）する。 【※】 応用の証明問題 	

【※】… 発想の交流を行った場面

⑤ 第1時～第2時の 具体的な展開と、指導の留意点

第1時	<ul style="list-style-type: none"> 定義による平行四辺形を、三角定規の組み合わせにより板書 (5分) <ul style="list-style-type: none"> 前時の復習により、動機づけを行う。 この定義が、第2時以後の条件[2]～[5]の証明の結論になるため、特に強調して確認を行う。 (プリント1)を配布し、他の作図の方法を募集する。 <ul style="list-style-type: none"> いかに未知の可能性が残されているか、独自の発想の余地が大きいかな等、自分が生み出す発想に期待を持たせる。
-----	---

<ul style="list-style-type: none"> ◦ 個々に考え、作図する時間をとる (15分) ・後の発想の交流につながる、個々の発想を生み出す段階である。時間をかけて、じっくりと検討させる。 ・意図が理解できない生徒、作図技術が身につけていない生徒、考えがまとまらない生徒を、机間巡視にて補う。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 座席を移動させ、2～4人で机を合わせ、作図方法を交流する。 (30分) また、共同で考える。 【※】 自分の方法を説明し、相手が自分の発想を理解することをめざす。 他者の方法が妥当であるか、互いの発想を検討し合う。 より新しい方法を、協力して考える。 ・十分に表現できない生徒を、机間巡視にて補う。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 授業終了の時間に、プリントを回収する。

授 業 準 備	<ul style="list-style-type: none"> ◦ (プリント1)の添削 ・平行四辺形が作図できている作品には二重丸 作図跡が残っていない等、発想が認められる作品には丸 発想が不十分な作品には『?』印とポイント をそれぞれ書き込む
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ (プリント2)の作成 ・表面：条件①～⑤に沿った代表作品と、その発想をした生徒名 ・裏面：間接的に条件を利用している作品の紹介 ・クラス毎にプリントを編集し、準備する。

第2時	<ul style="list-style-type: none"> ◦ (プリント1)を返却し、各自確認・検討をする。 (5分) ・机間巡視にて、『?』印の作品の生徒に補足説明する。 ・机間巡視にて、個々の質問に応じる。
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ (プリント2)を配布し、それぞれの四角形が平行四辺形になるかどうかを、2～4人のグループで相談しながら考える。 (10分) 【※】 ・周囲の机を合わせ、第1時とは別のグループを構成する。 同じグループ内で、プリント2の発想を持っている生徒の発想の説明を受ける。 ・協力して、プリント2の作図の方法を検討する。 ・相談によって理解しきれない疑問点をまとめる。

◦ (プリント2)の①②の作図を板書し、なぜ平行四辺形と言えるのかを発表し合う。	(15分) 【※】
<ul style="list-style-type: none"> ・②の作図を仮定、①の定義を結論として、証明の記述を導く。 ・生徒の発想を生かし、全体で意見を出し合って証明を記述したという実感を得させるため、自然な流れを大切にする。 	
◦ ②と同様に③の作図を板書し、証明の記述を導く。	(15分)
◦ ④⑤の作図を板書し、証明の記述を宿題とする。	(5分)

⑥ 発想の交流(【※】印)時の生徒の様子

第1時 定義を学習してからは、ノートに平行四辺形を描くときでも、三角定規の組み合わせによる平行線を引き、定義以外の方法を意識して使う生徒は少なかった。本時でも、2組の対辺が平行であること以外に、そう多くの方法があるとは予想していなかった様子である。平行線と二等辺三角形の性質と条件を学習した流れより、まず平行四辺形の性質の逆に着目し、取り掛かった生徒が多く見られた。続いて、複雑にコンパスで跡を残し、直線で結んで、平行四辺形らしき図形を生み出すことを考え、中には、余計な作図を削除して単純な発想にたどり着いた生徒もいた。いずれ、他者の発想が刺激と励みになり、ほとんどの生徒に意欲的な姿勢が見られた。

第2時 教員の添削(二重丸)により、自分の発想に自信を持った生徒は、主張にも強い口調が聞かれた。他者に説明することで、証明の記述に至る姿も見られた。また、自分の考えの及ばなかった条件には、予想を持ち、賛否を議論するグループも現れた。議論が深まり、決着のために証明を用いることで、証明の意義を学習することができた。

②のねらいは、発想と交流により概ね達成されたと考えられる。

⑦ 実践による今後の課題

第2時、第3時のプリント2に代わる方法として、黒板でアイデアを発表するなど、発想を交流する方法は、より目標を達成できる工夫が可能であると思われる。しかし、今回は、学級の現状や、ここまでの授業の積み重ねが不十分なため、作図を板書しながら発表したり説明をすることができなかった。日頃の授業の展開も含め、今後の課題点である。

4. おわりに

ほとんどの教材で、生徒の発想を取り入れて授業展開をする工夫は可能ではないだろうか。但し、授業の所要時間を展開の効率化によって確保する必要がある。その分、生徒が実感できる達成感や充実感が、個々の発想の参加により得られ、意欲と理解につながるものと思われる。今後も、様々な方法を検討していきたい。

(プリント1)

数字検算プリント 実施日 1999.12. 2年 組 番 氏名

～平行四辺形を作る～
何通りの作図を見つけられる？

<p>定義 AB // DC AD // BC</p>	

数字検算プリント 実施日 1999.12. 2年 組 番 氏名

～平行四辺形を作る～
何通りの作図を見つけられる？

<p>定義 AB // DC AD // BC</p>	

(プリント2) 表面

～平行四辺形を作る～
何通りの作図を見つけられる？

1 AB // CD, AD // BC

2 AB = CD, AD = BC

3 $\angle A = \angle C$, $\angle B = \angle D$

4 OA = OC, OB = OD

5 AD // BC, AD = BC

Handwritten notes: B組作品集, T.E est, N.T, M.N, M.A, M.T, T.M, R.M, KN MA TE AM, KI MA TI YK, TH, AK YH YI MA, DH SH NI PS, TM, NM, RM, DM, EM, FM, GN, HO, IO, JP, KP, LP, MQ, NQ, OQ, PR, QR, RS, ST, TU, VU, WU, XU, YU, ZU.

(プリント2) 裏面

Y.T

M.N

M.A

M.T

R.I.

△ABCは
3辺が等しい
1辺だけ3角形
△EBA, △DBC, △FAC
の頂点を結ぶ
△DEAFは
平行四辺形?

第3分科会 1C教室

ともだちとの関わりを深めよう

杉並区立四宮小学校 望月保美

バズ学習を生かした生徒指導－授業形態等の工夫

尼崎市立大庄東中学校 前瀧康彦

生徒指導に生かすブリーフカウンセリング

－解決志向アプローチを中心に

松阪大学 宇田 光

助言者

荻原克巳（南山大学）

久保田滋（芦屋大学教育研究所）

市川千秋（三重大学）

木村幸夫（豊島区立道和中学校）

司会者

鈴木 収（春日井市立高蔵寺中学校）

記録者

中村一裕（練馬区立光が丘第八小学校）

友だちとのかかわりを深めよう

杉並区立四宮小学校教諭

望月 保美

1. 主題設定の理由

近年、「新しい学級の荒れ」が、小学校での大きな問題となっている。その原因の一つとして、児童が、人とのかかわりの経験が少ないことが挙げられている。少子化が進み、地域社会での異年齢集団での遊びや、家庭内での子ども同士のかかわりが少なくなっている為であるといわれている。

生活指導は、学校生活全般で行うものである。そして、生活指導の目的は、自己教育力を高めることにある。そのためには、「自分を知ること」「人を知ること」が必要であると考えた。

担任学級は、4月に学級編制替えをした3年生である。小学校生活で初めての学級編制替えで、戸惑いや不安を感じている児童も多かった。また、認められたい欲求が強く、その欲求が満たされないと、泣き叫び、暴れる者もいる。学級全体としては、活動的で、活力のある児童が多い。学級の中では、自分の考えをうまく相手に伝えられなかったり、相手の考えが、わからなかったりするためのトラブルもみられる。これは、友だちとのかかわりが少ないためである。そこで、学習や、その他学校生活すべての場で、かかわりあいを深める場を多く持つことを大切にしたいと考え主題を設定した。

2. 研究の内容

- ① 構成的グループ・エンカウンターを活用した授業を月2.3回実施する。毎回ふりかえりを行いカードに記入する。
- ② 児童の変容を見るための学校生活満足度尺度（河村茂雄 崩壊しない学級経営をめざして 学事出版 1998）を実施して、学級児童の学級や友だちに対する満足度を把握する。
- ③ 協同学習を総合的学習に取り入れる。
生活指導の一環として、清掃指導を取り上げ、日常活動と意識の深まりを考
えての活動と双方で実践する。
 - ・日常活動 そうじピカ大作戦、今日のヒーロー・ヒロイン
 - ・深まりを考えての活動 総合的学習 「クリーン大作戦」

3. 実践

① 構成的グループ・エンカウンターの実践

構成的グループ・エンカウンターの5つの目的①自己理解 ②他者理解 ③自己

受容 ④信頼体験 ⑤感受性の促進 を網羅するように、また、児童の実態に即してエクササイズ実施計画を立てた。

本来、構成的グループエンカウンターは、日常生活から切り離された非日常の中で実施するものであるが、学校、特に小学校の場合は、児童が幼く、日常と非日常の区別が十分に出来ない。ここでは、構成的グループエンカウンターのエクササイズをあくまで友だちとのかわり方を知るための一つの手法として活用した。

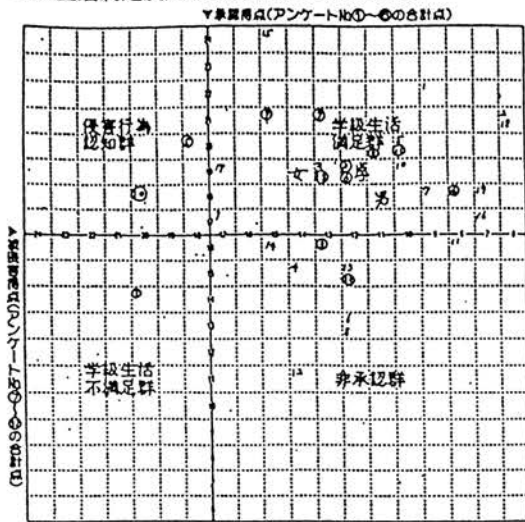
実施した構成的グループ・エンカウンターと目的

実施月日	エクササイズ名	目的
4月 7日	名前集め	他者理解
4月14日	カム・オン	感受性
4月28日	名刺交換	他者理解
5月 6日	カム・オン	感受性
5月15日	こおりおこ	信頼体験
5月21日	鉛筆トーク 運動会の練習	自己理解・他者理解
6月10日	カム・オン	感受性
6月17日	四つの窓	他者理解
6月24日	こおりおこ	信頼体験
7月15日	ありがとうカード	他者理解
7月17日	一学期がんばったこと	自己受容
9月 8日	動物園	感受性
9月18日	協同絵画(無言チーム ワークゲーム)	感受性
10月 8日	あなたの〇〇が好き です。	自己理解
10月12日	ブラインドウォーク	信頼体験
11月18日	協同絵画	感受性

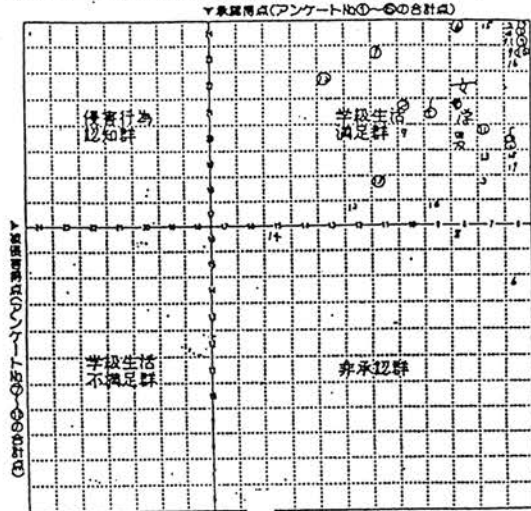
② 学級生活満足度尺度の実施

岩手大学河村茂雄助教授が、標準化した「学級生活満足度尺度」は、12項目のアンケートを取り、学級内でのいじめや悪ふざけの被害、適応の状態を測定する「非侵害因子：A」（7～12の項目）と、学級内での存在が認められているが、心を許せる級友の存在の程度を測定する「承認因子：B」（1～6の項目）のA、Bの得点を直交した座標軸とし、児童個々の質問項目の合計点の組み合わせから座標点を求めるものである。

学級生活満足度尺度は、学級の児童の変容を見るために、1学期5月14日に一回目、2学期11月26日に二回目を実施した。



下図のように一回目の結果は、侵害行為認知群に2名、学級生活不満足群に1名、非承認群に9名となった。



二回目は、構成的グループ・エンカウンターを計画的実施したり、生活指導での清掃活動の指導や協同学習を取り入れた「クリーン大作戦」を実施したりした後の11月26日に実施した。結果は、下図のようである。学級の29名の児童が、学級生活満足群に入り、3名は、非承認群に残った。

③ 協同学習を総合的学習に取り入れる。

- ・ 日常活動 [そうじピカピカ大作戦]

グループで分担の場所を力を合わせて掃除する。掃除中にみんなの気付かないような汚れた所を掃除していた人や特に一生懸命していた人を「今日のヒーロー、ヒロイン」として反省会で選ぶ。帰りの会で、皆に発表する。

- ・ 深まりを考えたの活動

清掃活動を行う意義を考えたり、調べたり、体験したりする中で清掃活動やその外の生活に意欲を持って行い、自分のしたいことを決められるようになると考え実施した。

総合的学習計画

(1) 学習グループの工夫

- ・ 協同で学習を進めるために、相互協力関係のできるグループ
異質のメンバー
相互の信頼関係があるグループ

になるようグループを構成した。

(2) 学習課題の工夫

- ・ 異質グループであるため、依存関係にならないように、一人一人に課題を持たせた。

(3) 言葉がけのできる工夫

- ・ グループ学習のグループをまわることで、認める言葉がけを工夫する。

(4) 役割を明確にする工夫

- ・グループの中で、一人一役(司会、記録、連絡、チェック)を分担し、グループでの有用観を持たせる。

(5) 学習方法の工夫

- ・協同学習の方法を取り入れ、個人の責任、リーダーシップの分担(役割分担)をする。

学習計画

国語	社会科	理科	道徳	学級活動	清掃活動
				なぜ、そうじをするのだろう?	そうじは、大作戦
			どのように、そうじをしたらよいのだろう。		
				汚い所探検隊	
				探検して、もっと知りたいと思ったこと	
	調べよう ・リサイクル ・掃除道具 ・掃除場所 ・発表会	・ゴミの中の虫 (ダニ、ハエ、ゴキブリなど)			
発表 ・そうじと自分					

<授業後の児童の感想>

- A児：そうじは、自分たちの健康のためにすることがわかって勉強が楽しかった。
- B児：皆で協力して調べたことやごみ中継所に行っておおき草のことも教えてもらったのが良かった。
- C児：皆で一緒に調べて本が、できたのが良かった。もっと調べ学習をしたい。

4.実践のまとめと今後の課題

意図的な構成的グループ・エンカウンターの実施と、学習活動に協同学習の方法を取り入れたことにより、児童のかかわりは、深まり、所属集団である学級に対する満足度は高まった。また、友だち同士の信頼関係も深まっている。学習活動の中に協同学習を取り入れたことは、自分が、不思議に思ったことをグループの仲間と励ましあって調べ、まとめていく学習を通して、かかわりの大切さも自ずと学習した。今後、協同学習の指導方法についての研修や実践を深めていきたい。

バズ学習を生かした生徒指導

－ 授業形態等の工夫 －

兵庫県尼崎市立大庄東中学校 前瀧 康彦

1 はじめに

現在、中学校は不登校生徒・校内暴力・学級崩壊の増加など問題が山積していながら毎日の学習実践を積みつつさらに新学習指導要領の準備とかなり忙しいスケジュールの真っ只中にある。そのうえに授業以前のいわゆる“問題行動に対する生徒指導”に取り組むとき、まず最初に考えなくてはならないことは、問題行動に対する対処療法である。しかし、“学校のあらゆる教育活動の中で、生徒一人ひとりの個性の伸長、社会的な資質・能力の育成、自己実現できる態度の形成を援助し自己存在感を持たせることである”という生徒指導本来の目的を達成するためには対処療法だけでなく“開発的生徒指導”を行う必要がある。即ち、中学校では教科担当としての日々の授業改善が必要なのである。

中学校では、“高校入試”という現実があるので、一斉指導による授業が主流にならざるをえないと思う。しかし、そのことや多忙を理由に授業改善・工夫に取り組みないことは、学習活動から脱落していく生徒を増やし、問題行動も増える一因となる。従来の知識を教え込むような授業のみに片寄るのを改め、子供たちが自分で考え、自分の考えをもち表現できるような力の育成を重視した指導が必要である。

2 社会科学習の実際

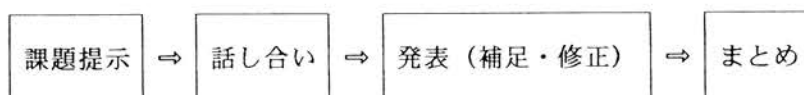
<授業のパターン>

①一斉授業（講義式） 黒板とチョーク・教科書という従来の授業法。どうしても教師の説明が中心となり、学習活動を活発で意欲的に展開するのは一部の者（主に成績上位群）になりがちである。（教師が主役になる授業は避ける＝授業中に教師が喋れば喋るほど子供が生きない）

知識を伝授するには、有効であるし否定はしないが、単に知識の量だけを学力というような考えは、これからの教育では通用しないことを意識した上で、一斉授業をする必要がある。

②班学習－その1－

成績の上位下位を問わず学習に参加させることが大切であり自ら学ぶ意志と方法を育てるため班学習を取り入れている。

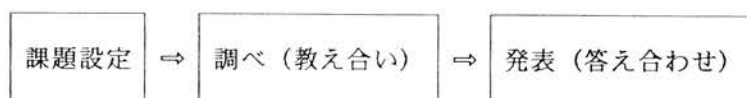


1時間中、班学習（話し合い）をさせるのではなく、一斉指導でおさえた事項を課題にする形で班で話し合いをさせる。

＜実践例＞ 99年2月実施の校内研究授業（社会科：性教育）

学習内容と教師の働きかけ	学級 全小員	予想される生徒の反応	教師の支援
<ul style="list-style-type: none"> ・生まれたばかりの赤ん坊に男女の違い（性差）は何かあるだろうか？ ・15年後の現在ではどうか？ 	0	<ul style="list-style-type: none"> ・性器の違い ・服装の色 ・スカート、ズボン、髪型 ・俗にいう ～らしさが出てくる かわいい、やさしい、おしとやか、積極的、行動的、さっぱりしている等々 	<ul style="list-style-type: none"> ・生殖機能の差については変更は不可能であるが、服装や髪型での～らしさの面は社会的性差で変更可能であり、性格的なことは男女関係ないことを
<ul style="list-style-type: none"> ・“～らしさ”は誰が決めたのだろうか？ 	0	<ul style="list-style-type: none"> ・何となく ・昔から ・絵本や童話 ・親から聞いた 	<ul style="list-style-type: none"> 知る。（個性である） ・はっきりした理由はない
<ul style="list-style-type: none"> ・次の話の中に不合理な点はないか？ “父親と息子がドライブに出かけ事故にあった。父親は即死し息子は重体で病院に運ばれた。手術室で彼を見た外科医は「これは私の息子だから私には手術できない。だれか他の医者呼びなさい」と言った。” ・資料を見て、内容を読む。 	0	<ul style="list-style-type: none"> ・父親は死んだのにおかしい⇒ ・意味が合わない ・意味がわからない 	<ul style="list-style-type: none"> ・外科医＝父親のように～は男性というのは思い込みの社会的性差（ジェンダー）であることに気付く。
<ul style="list-style-type: none"> ・法整備や制度的には一定の成果はあるしかし、本質的平等には何が必要か、自分の経験や次の資料から男女が本質的に平等になるためにはどんな課題があると思うか？各班で話し合う。 	0	<ul style="list-style-type: none"> ・職場への女性の進出 ・女性の政治への参加 ・男女とも意識の変革 ・男は仕事、女は家庭という考え ・男女の育児、家事の協力 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習した法律等について概要を思い出すとともに新聞記事より最近の動きを知る。 ・いかに男性が優位の社会通念が多いかを知る。
<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの結果を発表する。 	0		
<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな意見がでましたが君自身はどう考えますか？次時は先進国では、どんな様子かを見てください。 	0		

③班学習－その2－



例1 「今日は、日本の国会のしくみについてのプリントをしよう！

教科書と資料集を使って調べてみよう！」

この場合は1時間中、班を回り各班・各自の進行状況を把握・観察するとともに個別アドバイスを生徒との会話を楽しむ。

<班編成>

(1) 人数

- ・ 4～6名（男女混合）

(2) 編成方法と編成替え

- ・ 無作為抽選 ・ 名簿の順 ・ 等質分団

×能力別⇒人間関係や人格発達上で問題，なかよし同士

- ・ 4週間という実践例が多いが，学期ごと

(3) 班長

- ・ 班活動の効率をあげるための推進役だが，教師の代わりでない
- ・ できるだけ大勢に班長の機会を与える

(4) 班内の席

- ・ 班長は誰とでも話しやすい位置に，発言の少ない生徒への配慮
- ・ 隣接も対面も異性（相互理解に肝要），問題生徒同志が隣接しない

3 困難点や問題点の解明

職員間で話をしていると「私には班学習できないワ」や「班学習してもうまくいかない」などという話を聞くが，その時の困難点や問題点は以下のように集約される。

(1) 授業の進度が遅れるのではないか

学習はすべて班学習・話し合い学習でない。一斉授業もある。教師自身が指導計画の中に教え込むことと話し合うことの区別をしっかりと位置付けておく。

(2) 上位生徒が足踏み状態になるのではないか

他人に教えるということによって，不確かな点に気付いたり，一人では分からないことが発見できたり，繰り返すことによって理解が一層深まったりする。

(3) 依頼心が助長され，個人思考が深まらないのではないか

班活動であるが「まず自分で考える」という鉄則を指導する。教師が話し合いの指示をするまで各自で考えさせる。

(4) 無駄話が多くなったり騒がしくなりがちだが，どうしたらよいか

約束や話し合いのきまりを徹底させる。⇒学習のしつけ

「誰かが発言しているときは静かに聞こう」「学習に関係ないことは話さない」「先生の指示をよく聞く」など

話し合いのタイミングが悪い，課題が不明確，話し合いの時間が長すぎる時⇒騒がしくなりがち

4 学習指導と評価のあり方

(1) 教師からの評価

授業改善が進んでも従来通りの知識の量を測るようなテスト問題ばかりでは、新学習指導要領での“学力”とは言えない。社会的な思考・判断の力を評価するためのテスト問題や自分の考えを書いて表現できるように記述式にするなどの工夫も必要である。

<テスト問題例>

【1】 右の日本国憲法A～Cを見て、次の各問いに答えなさい。

(1) Aは日本国憲法前文です。ここに述べられている三つの基本原則は何ですか。

A 日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。

(2) Bでの「象徴」という言葉は、天皇をどのように位置づけているか説明しなさい。

B 第1章 天皇
第1条〔天皇の地位・国民主権〕
天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く。

(3) Cの条文からすると、あなたは自衛隊の存在が憲法に合っている（合憲）か、違っている（違憲）か、どちらだと思いますか。また、その理由も書きなさい。

C 第2章 戦争の放棄
第9条〔戦争の放棄、軍備及び交戦権の否認〕
①日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

生徒一人ひとりの学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力などの能力を評価学習の過程を重視したり、生徒のよい点や進歩の状況の評価する。自らの学習過程を振り返り、新たな目標や課題をもって学習していけるよう評価することが大切である。

(2) 生徒からの評価

教師自ら授業・教材研究を行い授業改善に取り組むことは大切であるが、いくら自分で満足していても授業を受ける生徒がどう感じているかが問題である。我々の仕事は所詮、自己満足であるかもしれないが、生徒がどう感じているかを知り、より一層の授業改善を図る目的で、年度末に生徒に以下のような様式で授業の評価をさせている。また、最後にその集計を掲載するが、ほとんどの生徒たちが班学習は「みんなでできるからよい」と答えている。

＜社会科＞先生の 通知表

この1年間、お世話になりました。今後の参考にするために以下の項目で先生を評価してください。成績には一切関係ありませんので、本音を書いてください。

学年	3	組	No	氏名
評価の基準 <A(5) B(4) C(3) D(2) E(1)>				
項目	一口コメント			評価
1	声の大きさ			A B C D E
2	黒板の使用について			A B C D E
3	プリントについて			A B C D E
4	内容の説明について			A B C D E
5	テスト問題について			A B C D E
6	テスト返しについて			A B C D E
7	補習について			A B C D E
8	質問について (※, 授業)			A B C D E
9				A B C D E
10				A B C D E
5段階で示すとしたら				2
感想・所見 D, Eが1, 2か3か4か5か Aが5か4か3か2か1か その他、書き添えてください。	オレ質問のイミがわからなかったのがあつたネ〜 プリントが あつすぎるで前さかん! ギャフは、けこうあつるいで!			

＜社会科＞先生の 通知表

この1年間、お世話になりました。今後の参考にするために以下の項目で先生を評価してください。成績には一切関係ありませんので、本音を書いてください。

学年	3	組	No	氏名
評価の基準 <A(5) B(4) C(3) D(2) E(1)>				
項目	一口コメント			評価
1	声の大きさ			A B C D E
2	黒板の使用について			A B C D E
3	プリントについて			A B C D E
4	内容の説明について			A B C D E
5	テスト問題について			A B C D E
6	テスト返しについて			A B C D E
7	補習について			A B C D E
8	質問について (※, 授業)			A B C D E
9				A B C D E
10				A B C D E
5段階で示すとしたら				4
感想・所見 D, Eが1, 2か3か4か5か Aが5か4か3か2か1か その他、書き添えてください。	テレビスが大きい。補習習もすべしと思つた。テストもプリントの内容がよかつたからうれしい。			

＜社会科＞先生の 通知表

この1年間、お世話になりました。今後の参考にするために以下の項目で先生を評価してください。成績には一切関係ありませんので、本音を書いてください。

学年	3	組	No	氏名
評価の基準 <A(5) B(4) C(3) D(2) E(1)>				
項目	一口コメント			評価
1	声の大きさ			A B C D E
2	黒板の使用について			A B C D E
3	プリントについて			A B C D E
4	内容の説明について			A B C D E
5	テスト問題について			A B C D E
6	テスト返しについて			A B C D E
7	補習について			A B C D E
8	質問について (※, 授業)			A B C D E
9				A B C D E
10				A B C D E
5段階で示すとしたら				4
感想・所見 D, Eが1, 2か3か4か5か Aが5か4か3か2か1か その他、書き添えてください。	先生は字がきれいだと思つた。授業した後は 1時間、あつた。勉強したと思つた。			

＜社会科＞先生の 通知表

この1年間、お世話になりました。今後の参考にするために以下の項目で先生を評価してください。成績には一切関係ありませんので、本音を書いてください。

学年	3	組	No	氏名
評価の基準 <A(5) B(4) C(3) D(2) E(1)>				
項目	一口コメント			評価
1	声の大きさ			A B C D E
2	黒板の使用について			A B C D E
3	プリントについて			A B C D E
4	内容の説明について			A B C D E
5	テスト問題について			A B C D E
6	テスト返しについて			A B C D E
7	補習について			A B C D E
8	質問について (※, 授業)			A B C D E
9				A B C D E
10				A B C D E
5段階で示すとしたら				5
感想・所見 D, Eが1, 2か3か4か5か Aが5か4か3か2か1か その他、書き添えてください。	最初は、少し不安だつたけど1年間授業を受けて見ると、ときわかにやさしい授業だつたと思つた。すごく一生懸命教えていただき楽しい授業でした。1年間、本当にありがとうございました。			



＜社会科＞先生の通知表集計結果

評価の基準		＜ Aとてもよい Bよい C普通 D悪い Eとても悪い ＞				
項目		評価の集計結果				
1	声の大きさ	A 71%	B 10%	C 10%	D 7%	E 0%
2	黒板の使用について	A 18%	B 32%	C 44%	D 4%	E 0%
3	プリント（資料） について	A 25%	B 29%	C 36%	D 7%	E 4%
4	内容の説明について	A 32%	B 46%	C 14%	D 4%	E 4%
5	テスト問題について	A 36%	B 46%	C 18%	D 0%	E 0%
6	テスト返しについて	A 14%	B 14%	C 61%	D 8%	E 4%
7	班学習について	A 54%	B 21%	C 21%	D 4%	E 0%
8	質問について(中身、姿勢)	A 18%	B 29%	C 43%	D 10%	E 0%
5段階で示すとしたら		5 14%	4 64%	3 18%	2 8%	1 0%

5 おわりに

平成14年度から実施の新学習指導要領では、学校5日制導入にあたり、生涯学習時代に向けて子供たちに“生きる力”に育成を唱えている。生徒指導が、個性を伸ばし自己実現を図るという目的であると考えるとき、学校が日々の授業等の中でより一層の開発的生徒指導に力を注ぐ必要がある。

今年度は「学級崩壊」の問題もクローズアップされ、少年非行も戦後第4のピークであると言われている。この原因の1つは、自律心のなさや親と子ども、先生と生徒、生徒同士のコミュニケーションの不足であると考えられる。バズ学習の基本精神が生徒間、先生と生徒、親子での人間のかかわりを大切にするということから、学校が日々の授業等の中で大いに利用されて授業改善が進むことを期待したい。

生徒指導に生かすブリーフカウンセリング -- 解決志向アプローチを中心に

松阪大学 宇田 光

1 ブリーフ・セラピー（短期療法）

- ・短期： クライアント、カウンセラーともに負担が少なく済む。
長期にわたる「本格的な」治療と効果に差がない。
- ・精神治療のコスト 短期間に治療を終えないと困る現実（保険）
- ・困難な事例、逆効果がこわく内面深く入れない事例（PTSDなど）。
- ・二つの研究拠点

- 1) MRI（カリフォルニアにある研究所 ワツラビックら）
問題を解決しようとして陥る悪循環に着目する。
「戦略的」(strategic)な見方をする。リフレイミング技法など

- 2) BFTC（短期家族療法センター、ミルウォーキーにある研究所
ドゥ・シェイザー、キム・バーグ） **解決志向アプローチ**

2 問題志向の限界

問題志向： 診断し、「問題」を発見し、(しばしば内面にある)「原因」を探り、除去して治す・・・ 事故の際の対処、ガン細胞、不登校

- 1) 「善くするには、悪いところがなければならない」
- 2) 過去指向である
- 3) 内面を深く掘り下げるので時間がかかる（と仮定する）

3 解決志向アプローチ

- 1) 理論の特徴
 - ・問題を直接扱わない。何が問題なのかを知る必要はない。
 - ・リソースや問題の「例外」に着目させる。うまくいかない解決法が用いられていれば、別の方法を考えてもらう。
「クライアントが一番良く知っている」 ⇔ 教師の立場
- 2) 面接の手順
 - ・宿題を出す、初回面接、来談理由を確かめる

- ・「カスタマー」、「ビジター」、「コンプレイナント」のどれかを見極める。
- ・コンプリメントで支える。

質問技法

- a 例外 問題が少しだけましだと思った時は、どんな様子だった？
- b 結果 「問題が解決したら、まずどんなことをするかな？」

ミラクル・クエスチョン

「奇跡がおこって問題が消えてしまったら、どんなことでわかるでしょうか？」

- c スケーリング・クエスチョン
- d コーピング・クエスチョン うまくいった対処方法をもっと多く。

3) 意義、展望

- ・ 学校でやれることは限られているため、実際的な方法である。
- ・ 心理的な負担が少ない。
- ・ プライバシーに深入りせずに対処できる。
- ・ 今までと180度違うものの見方が必要。慣れるのに多少時間がかかる。

4 学校でよくある問題場面への応用

1) 遅刻の指導

「最近遅れずに登校できたときには、どんな工夫をしていたのかな？」

「早く来るとどんな気分になるかな？」(宇田、有門、市川 1999)

2) 乱暴な子に、我慢のこつを教えてもらう。

「君はすごいな、そんなひどいことを言われて、どうやって我慢したの？」

3) 学級カウンセリング

学級崩壊への対処 スクレア(翻訳中) 6章

<文献>

- アマティー、E. S. 著 市川千秋・宇田 光(編訳) 1996 学校での問題行動をいかに解決するか—短期戦略的アプローチの実際 二瓶社 2000円
- デュラン、M. 著 市川千秋・宇田 光(編訳) 1998 効果的な学校カウンセリング—ブリーフセラピーによるアプローチ 二瓶社 2400円
- スクレア、G. B. 翻訳中 うまくいく学校カウンセリング 二瓶社

第4分科会 1D教室

一人一人の活動意欲を高める活動の工夫

杉並区立泉南中学校 惣田修一

磨き合う生産的な対人関係処理能力について

創価大学 関田一彦

助言者

岩田鎮人（春日井市生涯学習室）

石田裕久（南山大学）

後藤東一（土岐市立泉中学校）

司会者

大脇希文（春日井市立藤山台小学校）

記録者

田中誠一郎（八王子市立第一中学校）

一人一人の学習意欲を高める活動の工夫

杉並区立泉南中学校 惣田 修一

*ねらい

授業にゲーム的要素を取り入れ英語に対する興味関心を高める。

*ねらい設定の根拠

- ・「ゲーム」には、自然に引きつけられる不思議な魅力がある。
- ・生徒の学習意欲を高めるためには、日頃の教育活動の中で、できるだけゲーム的要素の多い活動をすることが効果的である。

ゲーム的要素の多い学習形態

1. Bingo <ビンゴ>

① 目標

- ・ **Warming up**
- ・ **New words** の獲得
- ・ 簡単な会話の受け答え

② 指導過程

- ・ 毎授業、最初の数分を使って行う。
- ・ 簡単な例文や、派生語、同意語、反意語、など幅を広げる。

③ 留意点 (評価の工夫)

- ・ スピーディーに行う。 <リズム>
- ・ ビンゴ賞 (ステッカー。外国のコイン。)
- ・ 点検の際にプラスの評価

2. Letter Hunt <レターハント>

① 目標

- ・ スペリングの確認

② 指導過程

- ・ アルファベットカードの作成
- ・ **Pair Work** (ペアーワーク)、**Group Work** (グループワーク) で得点を競わせる。

③ 留意点

- ・ 取った得点を記入し回数を決めて (たとえば10回戦) で行う。
- ・ 男女別で競わせる。
- ・ リーグ戦で競わせる。

3. Drawing Pictures <お絵かき>

- ① 目標
 - ・正確なリスニング能力と創造性
- ② 指導過程
 - ・事前に新出単語の十分な練習
 - ・ひとつひとつの文をゆっくりはっきりと発音
 - ・グループワークで行う。
- ③ 留意点 (評価の工夫)
 - ・絵の評価を生徒全員で行う。

4. Making a story <物語>

- ① 目標
 - ・絵の内容にあった適切な文を英語で表現する。
- ② 指導過程
 - ・童話や日本昔話が漫画になったものを使って英作文させる。
 - ・原画を元に絵を描かせる。
 - ・発表の時には、絵をバラバラにして、A Tにその順番を考えさせる。
- ③ 留意点
 - ・多少の文法的なミスは、できるだけ無視し、意味が伝わるか伝わらないか、をポイントにして英文をチェックする。
 - ・グループで協力し合うように配慮する。

5. English Songs <英語の歌>

- ① 目標
 - ・リスニング能力の向上
- ② 指導過程
 - ・英語の歌を聴きながら、ブランクを埋める。
- ③ 留意点
 - ・生徒の興味関心を持てる歌を選ぶ (タイムリーなもの、発達段階)

6. Guess Word Game <単語推理ゲーム>

- ① 目標
 - ・語彙の拡大と確認
- ② 指導過程
 - ・グループに分かれて、単語を推理する。
 - ・推理の仕方は、数当てゲームと同じ。
- ③ 留意点
 - ・グループで得点を競う。

磨き合う生産的な対人関係処理能力について

創価大学教育学部助教授

関田 一彦

はじめに

グループや班で活動させるとき、「みんなで仲良く〇〇しなさい」という指示を出す先生がいる。しかし多くの場合、期待するほどの成果が上がらない。“仲良く”することを強調して悪いわけではない。問題は、1) どのような振る舞いが仲良くすることなのか、そして2) 仲良くすることと〇〇することがどう関連するのか、はっきりしていないことにある。

グループで課題に取り組ませる場合、お互いが一所懸命にグループに対する責任を果たすことでのみ良い結果が得られるような課題であれば、その作業は協同的なものにならざるを得ない。表面的に調子を合わせ、付和雷同することが仲の良い取り組みではない。時には意見を対立させ、課題に即してメンバー同士がぶつかり合うことが、より良い成果をグループにもたらすことであろう。協同作業における自らの責任と役割を自覚すれば、いい加減な妥協はメンバーに対しても自分に対して不誠実であることに気づく。表層的な親しさに安んじてばかりでは本当の信頼関係は築けない。従って、取り組みの始めに仲が良いかどうかではなく、協同作業の結果として相互信頼が深まるような課題や指示を教師は与えなければならない。

本稿では以上のような認識に立って奨励したい取り組みとして、集団活動における多様な葛藤や対立を生産的に処理し、価値的に転換していく技能の育成を、ミネソタ大学のジョンソン兄弟が研究開発してきた協同学習技法に基づいて述べてみたい。具体的には、対立を消極的に回避するのではなく、相互理解を深め、より洗練された思考や作品を生み出す機会とするために指導・導入したい視点や活動を四つほど紹介する。

1. 建設的討論法

例えば遺伝子組み替え農業について賛成と反対の立場から論じ合う。互いの立場から相手を論駁しようとする試みは簡略なディベートととも見なせよう。ただ、この後がディベートと大きく違う。一通り相手の主張を聴いたら、今度は相手と立場を交代して、再び論駁を試みるのである。つまり、賛成派だった者は反対派として、今まで反対派であった者を説得するのである。逆に反対派であった者

は、今度は賛成派として反論するのである。これを視点交換という。さらに、視点交換して一通り互いの主張を聴いたら、次に双方の主張を活かしながら互いに協力して統合的な解決案（折衷案）を一つ創るのである。この一連の活動を建設的討論法（constructive controversy）と呼ぶ。

この方法で、トピックの理解が深まるばかりでなく、子どもたちの小集団技能育成に関して少なくとも三つの効果が期待できる。

- 1) 視点交換するために、真剣に相手の主張を聴き、自分のものにすることができる。
- 2) 相手の人格ではなく、その主張の論理や合理性に焦点を当てて批判・反論できる。
- 3) 互いの立場を尊重しつつ、より良い解決法を考えるために協力できる。

意見や利害の対立に際して、相手の立場や感情を全く顧みることなく自分の主張を通そうとすれば、その人との関係は非友好的になりやすい。特に相手はこちらの言い分を認めない場合に、それは相手はこちらを嫌っているとか、愚かであるとか、偏屈であるとかいった見方をしてしまうと、どうしても相手の人格を非難するような対応に出てしまいがちになる。討論の際に相手の人格を攻撃したのでは感情的な対立は深まっても、論議されている問題の多面的、多角的な理解は深まらない。そこで、この活動を用いるときには必ず「相手の人格を責めるのではなく、特定の言動を批判する」ことをクラス全体の合意事項（話し合いの規則）として確認しておく。

2. 葛藤解決技能訓練

建設的討論法は学習課題に即した意見対立を意図的に発生させ、それをより良い解決のチャンスとして活かす体験を学習活動の中に組み込む仕掛けである。ところが実際の学校生活で子どもたちが直面する対立や葛藤は突発的であり、教師の視界から外れたところで発生しやすい。では、“けんか”や“いじめ”といった生活指導上の葛藤については対人技能を伸ばすチャンスとして利用できないのだろうか。

利害の対立について当事者たちが互いに交渉する能力（negotiation skill）が高ければ、その対立は必ずしも破壊的な結果で終わらない。むしろ、交渉を通して相互の立場を理解し合い、葛藤が生起する前より、葛藤が処理された後の方が人間関係が良くなることもあろう。対立や葛藤を過度に恐れ、必要以上に回避するのは葛藤解決のための交渉技能が乏しいか、自らの技能に自信がない場合が考えられよう。

そこで教師は、クラス全体に対して次のような交渉手順を様々な機会に繰り返し指導することが必要となる。

- 1) 当事者は互いに自らの欲求を明確に述べる
- 2) 当事者は自らの気持ち（感情）を明確に伝える
- 3) 相手の言い分（考え方や正当性）を聴き合う
- 4) 互いに相手の視点や言い分を要約して確認する
- 5) 双方に益するような解決案を少なくとも三つ考え出す
- 6) 双方が納得いく案を採用して葛藤を解消する

ここで大事なのは、問題（欲求）と感情を区別して述べることである。何を問題と認識し（例：相手のBという言動が、自分のAという目的達成を妨げている）、その問題のためにどのような感情を抱いているのかを、互いに言語化し表現することで交渉が始まる。

この手順は学校生活の中だけに限定されるものではなく、実生活の様々な場面に応用可能である。ただ、対立している当事者同士が話し合いによる解決を欲しない限り使えない。話し合いで解決しようとする思いが高まるのは、相手との人間関係を良好で長期なものにしたいという願いが強いときである。学校という場では自在に協同学習を組織できるので、子どもたちの間に良好な人間関係を望む気持ちを醸成しやすい。また、学校であれば交渉の失敗ややり直しも致命的な結果を招くことは少ない。むしろ交渉技能を使って望ましい解決が出来たという体験は、対人関係における子どもたちの自己効力感を高めるのに大いに役立つ。

3. Tチャートによる信頼獲得行動の明確化と訓練

グループのメンバーが互いに馴れ合いで無責任あるいは不誠実な対応を重ねている限り、本当の協同学習は成立しない。できる子に過度に依存したり、力の出し惜しみをしたり、あるいはグループの不振をできない子のせいにして、といった非協同的な取り組みが常態化したグループではしばしばメンバー同士の信頼関係が崩れてしまっている。そして一度崩れた信頼関係を再び構築するのは容易でない。

信頼関係を取り戻すためには、まず、メンバー各自が問題を認識し、改善しようという気持ちになることが前提である。その上で、子どもたち自身にどのような言動が信頼獲得に有効か、あるいは信頼喪失に有効かを明確に意識させることである。この指導の際に有益なのがTチャートである。（Tチャートは信頼獲得に限らず、あらゆる集団技能・協同技能の育成に役立つ。）

黒板に大きくTの字を書く。横棒の上に目標（この場合は「信頼を得る」）を書き、子どもたちにどうすれば信頼を得られるか、具体的な言葉や仕草を尋ねる。

縦棒の右には信頼を得るために有効と思われる言語表現を、左側には仕草（身体表現）や具体的行動を、子どもの発言を活かしながらまとめていく。

具体的にどうすれば善いのが判ったら、その中のいくつかを指定し、グループ活動に際して意識して行うよう指示する。必要ならロールプレイをして、期待される行動を明確にする。教師はどのような対人関係技能であっても、子どもたちがそれを既に十分修得していると思っはいけない。通常の教科内容と同じように、必要なら何度でも反復練習をさせることが大切である。

4. 改善手続きによるフィードバック

協同学習集団が向上していくためには“改善手続き (processing)”と呼ばれる相互支援的な総括が不可欠である。その基本は、どんな些細なことでも互いの貢献を認め合うことである。自らが所属するグループに対して肯定的な感情が高まるほど、メンバーからの期待に応えようとする気持ちも強くなる。

その上で、更なる向上のために具体的な改善点を検討する。この時、馴れ合いの親しさを越えて、協同作業のパートナーとして互いの役割と責任を意識し合うようになっていけば、互いの人格を非難することなしに改善すべき言動を指摘し合える。また、グループの期待に応えようという気持ちを抱いているので、メンバーからの指摘に対して反発することなく応じることができる。教師はグループ間巡視を行い、子どもたちがどのようなコメントを交わしているか注意深くモニターしなければならない。

まとめ

共に磨き合うために衝突することを恐れず、協同の成果を最大にしようとする願いを子どもたちが抱くためには、肯定的な相互依存関係の構築が絶対条件である。グループの相棒が理解を深め力をつけるのを支援すればグループとしての成果に結びつく。自分自身の学習が進展することは、自分のためだけでなく、同時にグループへの貢献にもなっていく。こうした相互依存関係の中でグループのメンバーに対する肯定的な感情も高まる。この友好感情をより確かな信頼感に高めるには、互いに必要なアドバイスや注文は厳しくも誠実に行うことを是とする雰囲気グループのメンバー全員で共有していることが望ましい。

謹直な指摘は、する方もされる方も然るべき技能と体験が必要である。その人柄を責めずに相手の言行を批判する技能。意見が対立しても、建設的な話し合いを行なおうとする態度。そして葛藤を自らの交渉で打開した体験。こうした訓練や経験を日常の学校生活で積み重ねることができれば、子どもたちの対人関係技能は大きく伸びるに違いない。

第5分科会 1E教室

3年間の保育体験から

青梅市社会福祉法人かすみ台福祉会かすみ台第2保育園 野嵩淳子

地域との連携について

杉並区立泉南中学校 石上和宏

助言者

望月和三郎（東京都バズ学習研究会事務局）

丸山正克（豊川市民病院院内保育所）

太田信夫（筑波大学）

司会者

斎藤 進（杉並区立東田中学校）

記録者

坂本 司（清瀬市立清瀬第三中学校）

3年間の保育体験から

青梅市社会福祉法人かすみ台福祉会かすみ台第2保育園

保育士 野嵜 淳子

1. はじめに

私の勤めているかすみ台福祉会は今年でちょうど35年目を迎えました。この福祉会は青梅市の中でも大きな法人で、その中でもかすみ台第2保育園は青梅市の保育園32園のうち一番大きな保育園でもあります。生後57日目の0歳児から就学前の5歳児までの約200人が登園しています。

運動会、作品展、お遊戯会の盛大な行事をはじめ、季節ごとのさまざまな行事も行っています。また、全園児を対象に音感保育、3、4、5歳児は体育指導、4、5歳児は美術指導も行っています。

2. 私の体験

私がかすみ台第2保育園に勤めて今年で4年目になります。

現在までに担任したクラスは、1年目2歳児、2、3年目0歳児、4年目（現在）2歳児です。

(1) 子どもへのかかわり方

毎日の生活の中で一番大変に思ったことは子どもたちとのかかわり方でした。一人ひとりが皆違う個性をもっているのも、その子どもに合わせたかかわりをしていかななくてはいけないからです。

①子どもの様子を知る方法

ア. 前の年に担任をもっていた先生に詳しく話を聞くこと。

イ. 登園・降園時の親との会話などから子どもの様子を知る。

ウ. 児童票を読み参考にすること。

直接話をする他にも毎日持ってくるお便り帳があります。毎日は園の様子を記入し伝えられませんが、できるだけ多くお伝えしていくようにしています。

②児童票

子どもの成長の記録を書いたものです。その他にも、住所、家族構成、家族の職場、かかりつけの病院、保険証番号・名前、今までにかかった病気、受けたことのある予防接種、保護者から見た子どもの生活、園で注意してほしいことなどを入園時に書類を配布し親に協力していただいています。

毎月行っている身長体重測定の結果など、さまざまな事柄も記入しています。

③成長の記録

0歳、1歳児は毎月。

2歳児は4月、6月、8月、10月、12月、3月

3歳児は4月、7月、10月、1月、3月

4歳児は4月、8月、12月、3月

5歳児は4月、10月、3月

年齢によって記入する月が違ってきます。年齢が低い方が短い期間での成長が大きいため、記入する回数も多くなってきます。この他にも何か変わったことなどがあつた場合はその都度記入していきます。また、水疱瘡などの感染症にかつた場合には、病院で書いてもらった治癒証明書を提出してもらっています。

毎年担任が代わるのと同じで、児童票を記入していく人も毎年代わっていきます。ですが、この児童票を読み返していくと簡単ですがその子どもの生活の様子や性格などが知ることができます。だから、クラスが変わってもすぐに個々に合つたかかわり方ができるのです。

(2) 児童票の記録の紹介

① Aくんの場合(2歳から5歳までの記録)

2歳児4月

散歩に出かけると知っている物や、行つた事があるところを通る時「～があるよ。」「～と来た。」と嬉しそうに保母に伝えてくれる。覚えた歌や、手遊びを大きな声で歌い楽しんでいる。朝の体操ではきちんと並び、音楽に合わせて積極的に体を動かしている。オムツをぬらす事が少なくなつてきた。また、トイレで排尿ができた場合「出たあ」と嬉しそうに伝える。

2歳児8月

日中パンツで過ごしている。昼寝時はオムツにする事があるがほとんどぬらす事がないのでできるだけパンツで寝るようにしている。衣服の着脱はとてもゆっくりであるが自分からやろうという気持ちが見られるようになってきた。だが、まだ保母の援助が少し必要である。体験した出来事を言葉を使つていろいろと話をしてくれる。

2歳児3月

友だちと過ごす事が多くなつてきた。また、言葉よりも先に手が出てしまいトラブルになることも増えてきている。衣服の着脱では、自分でやろうとせず、すぐに保母に援助を求める。声をかけられ促されると自分で行う。排泄は自分から尿意を伝えトイレに行く。テレビ番組や歌謡曲などが好きでよく口ずさんでいる。好き嫌いをせず、全量を食ふことができる。お遊戯会では遊戯も合奏も元気良く行え、楽しく参加できた。

3歳児10月

いつもおだやかで友達に意地悪をしたり言つたりする事がないので誰からも好かれていふ。特に女の子から好感をもたれ給食時には女の子の中に入つて座つていふ。遊戯、かけっこにと運動会の練習にはまじめに取り組み整列、集合にも頑張ろうとする姿がみられた。保母の話、体育指導、音感保育においても話を聞こうとする態度が見られる。内容も理解できている。冬服になり袖が長くなつても

一人で袖を裏返し着脱をすばやく済ませている。食欲旺盛。何でも残さず食べられている。作品展に向けての制作には内容を理解し進める。苦手だったハサミを使っての制作も上手に扱えるようになり自力で仕上げられるようになる。

3歳児 3月

粘土で立体的な形が作れるようになり、それを使って友だちと会話をしながら楽しんでいる。お遊戯会では合奏で大太鼓、小太鼓を演奏する。リズム感が良く遊戯も自信を持って踊ることができていた。何事にもまじめに取り組んでいる。行動にも活発さが増し物事の善悪も3歳児なりに理解できている。

4歳児 12月

制作時には集中して話を聞くことができているが、折り紙は苦戦している。細かい作業はあまり好まないが、共同制作など大きなものを作ることを楽しむ。文字に興味をもちはじめ、真似をしたり、知っている字を書いて楽しんでいる。今は、絵より字を書く事の方が多い。遊びも活発になり、言葉も乱暴になってきている。本当にやってはいけない事などは区別でき、考えながら遊ぶことができている。

5歳児 4月

年長組に進級し、期待をもち笑顔で登園している。自分自身でも自信がついてきて友だちを引っ張っていつてくれている。クラスでも中心的な存在となりそうである。恥ずかしながらも家庭での事を話してくれたり「今日は何するの？」など聞いてきたりする。明日は体操があると知ると家へ帰り自分で体操服の用意をしたり、料理の日はエプロンを用意しているとの事。身のまわりの事もしっかりとできている。

②0、1歳児の記録

0歳は、以前の記録は何もありません。ですから、毎日の親との会話がとても重要となります。

0、1歳児には児童票の他に、家庭での毎日の生活を記入してもらった「連絡帳」があります。何時に何をしたか？朝食・夕飯は何を食べたか？排便はどうか？家での様子など親からの一言欄もあります。もちろん、何をして過ごしたかなど園での様子を記入していく職員からの一言の欄もあります。このノートは親の立場からすると「めんどくさい」と思います。ですがこのノートは職員にとって子どもの様子を知る一番の方法なのです。また、0、1歳児は自分から話をして意思を伝えることができないため、登園時には必ず検温と視診、昼寝前にも検温をしています。

Bさんの場合

Bさんは、まだミルクしか飲んでいません。朝ミルクを飲んだ時間によって次のミルクの時間も変わってきてしまいます。こういう時に連絡帳を見ると何時にどの位の量を飲んできたのか知ることができます。

Cさんの場合

今日は朝からグズグズしているがどうしたのかなという時はまず熱がないか朝の体温を確認し、ノートを見て何か変わった事がないかも確認します。この時に生活が記入してあると昨日の夜は 11 時すぎまで起きていたから眠くてグズグズしているのかとわかります。このように、ノートで確認し対応していくこともあります。

(3) その他の記録

児童票や連絡帳の他にも月の指導計画、週案、日誌があります。0、1 歳児の指導計画は、一人ひとりにあった計画を立てていきます。2 歳児以上のクラスはクラス全体の子どもの計画を立てていきます。

書類の保存の仕方としては、児童票は子どもたちと一緒に年長まで持ち上がり、卒園した後にまとめます。途中で退園してしまった子は、退園児ごとにまとめて閉じてあります。0、1 歳児の連絡帳は卒園まで保育園で保管し、卒園の時に親にお返しします。

その他の指導計画、週案、日誌などは一年ごとにきちんとまとめ閉じています。

3. 体験から得たこと

この3年間でさまざまなことを身に付けてきたと思いますが、日が経つにつれ保育士になったばかりの時の気持ちを忘れていっているような気がします。

4 年目になると役割も多くなり子どもたちと接する事以外にもさまざまな仕事をまかされてきます。だからといって子どもとかかわる時間を少なくしてはいけないと思います。子どもと同じ目線で会話をして、しっかり気持ちを受け止め、子ども中心の保育を大切にしていきたいと思います。

私は、毎日必ず一回はクラスの子どもみんなと話をすること、クラスで目立たない子と多く接する事にしています。毎日少しずつ話をしていくうちに徐々に信頼関係がうまれてくると思います。どちらもとても簡単そうですが意外と難しく気をつけていないとできない時もあります。

4. まとめ

私のクラスにいるDくん(2歳児)は、家ではたくさん話をしているそうですが保育園では「おはよう」という言葉もなかなかいえませんでした。でも、11月ぐらいから通園かばんに新しくキーホルダーがつくと私の服を引っ張り自分から見せにきてくれるようになりました。また、恥ずかしそうに「おはよう」も言えるようになってきました。12月になってからは私の質問に対しても自分の答えをしっかりと返してくれるようになってきています。

なかなか自分を表す事ができなかった子が少しずつ自分を表に出し、友だちと遊んでいる姿を見るととても嬉しいです。

これからも毎日たくさんの子どもたちと話をしていきたいと思います。これは、私にとっての課題でもあると思います。保育士を続けていく上でいろいろな事があると思いますが、何事にも失敗を恐れず挑戦していきたいです。

地域との連携について

杉並区立泉南中学校

教諭 石上 和宏

1 はじめに

子どもの成長を見守り、助けるのが親や教師そして地域の方々の役目といえます。子どもは単に知識を身につけるだけで人間らしく成長するわけではありません。授業の中で、特別活動の中で、道徳の中で様々な人間関係の中で人間らしく成長していくのです。バズ学習は「教師と子どもが協力して、よりよき人間関係を形成しつつ、学習を進めていく学習体制です。そこで学習過程に、人間関係の形成と学習を両立させる場を、意図的に設定します」とあります。今は「教師と子ども」というように狭く学習をとらえることではいけないのではないのでしょうか。2002年からは新学習指導要領で教育が完全実施されます。学校教育の基調の転換がいられています。授業も変わる必要があります。授業も「教師と子ども」だけではなくて、地域の方や卒業生といった多くの方々が関わるようになってくることが子どもを育てるといった観点から考えると必要だと思うのです。子ども同士の人間関係も大切ですが、大人と子どもの人間関係も重要ではないのでしょうか。企業の中には情報化の進展の中でOJTはできないといわれています。そうになると一層教わりながら先輩との人間関係を深めてきた新入社員が自分で身につけていくことになるのです。すなわち人間関係が一層希薄になることが考えられます。そうであるならば、義務教育のうちから子どもや教師といった狭い学習場面を想定するのではなく、子どもや教師以外の地域の方や他の先生、先輩などがいて、色々なことを教えてくれるといった学習場面もあっていいのではないのでしょうか。本実践は、そういったことを念頭に取組んだものです。

2 実際の取り組み（参観型から参加型へ）

(1) 地域に開かれた学校づくり

- ① 本校は数年で大きく変わった学校である。その変化の要因は学校に多くの保護者や地域の方に来ていただくことに始まった。

②具体的な取り組み

- ア 運動会、学芸発表会、授業参観を日曜日に行なうようになった。これによって、参観者の数が増え、家庭でも話題にできるようになった。
- イ 公開授業週間を1学期と3学期に1週間ずつ設けた。これによって、小学校の先生が参観にこられ、授業後に生徒と小学校の先生と一緒に話せるようになった。
- ウ 父親の会を設けた。これによって、父親との語らいができるようになり、生徒とも父親の話題を出せるようになった。
- エ 生徒が自分の相談しやすい先生と相談できる教育相談週間を設けた。これによって、教師と生徒の語らいの時間がもてるようになった。
- オ 地域連絡協議会を設け、会が主催となる催し物を行なうようになり、生徒会が主

役を演じるようになった。

(2) 地域・保護者と共に行う教育

① 全校で取り組んだ行事

ア 地域で学ぶ安全教育・・・土曜日に赤十字の方に来ていただき、大災害が起きたときに中学生は何をするのか、また、その場合に危険なところはどのようなところかの学習をする。この話は地域や保護者の方も一緒に聞き、その後、危険箇所をグループごとに確認しながら地区班の地域を回り、防災マップを作成した。

イ 地域で行った職場体験・・・全学年を対象に学区域の商店などに一日職場体験にかけた。職場はできる限り生徒の希望にそうようにした。自分の生き方、礼儀などの人間関係をそれぞれの生徒が学んだ。

② 学年で取り組んだ行事

ア 博物館見学・・・・・・・・地域にある博物館の見学を行い、学芸員の先生とのT Tで授業をした。生徒は学芸員の先生によく質問した。

イ 上級学校訪問・・・・・・・・生徒がどこの上級学校に訪問したいかを相談し、行きたい学校を決め、訪問した。

ウ 沖縄を学ぶ・・・・・・・・地域の祭りの一つにもなろうとしているエイサー踊りを地域の方々にきていただいて学校で学習した。

③ 教科で取り組んだ活動

各教科で外部講師の先生を招聘して授業を行った。国語では音に着目し、円になって色々な音を聞き、それを言葉で表現した。友だちの表現を聞いて、納得したりしていた。数学では卒業生にきてもらって、数学の話をしてもらい、数学についての関心を高めた。技術家庭科では、グループごとに講師の先生の話聞いて、班ごとに予想したり、話し合ったりして染色の実験をした。このように各教科で外部講師の先生を招いて、外部講師の先生や友だちとの人間関係を深めながら多くの学習についての関心を高めたり、技能を身につけたりしていた。

3 終わりに

これらの実践は生徒にとってよかれと思い、行ったものです。これらの実践を通して、生徒は礼儀正しくなったり、言葉遣いが良くなったりと本来の学習のねらい以外の成果をあげました。これらははじめから意図したものもありましたが、そうでないものもありました。今後はどのような活動をするかと生徒がどう活動するのかを予想し、様々な活動を位置づけて行く予定です。

<記念講演>

こころを育てる園芸活動

園芸家 柳 宗民先生

3 子どもの教育の中で、動植物とのつきあい

- (1) 理科教育家情操教育か
- (2) 命の尊さを識(し)る

寄稿

バス学習の原理

中京大学 杉江修治

バズ学習の原理

中京大学教授 杉江 修治

学校学習全般をおおう幅広い学習指導の原理を提供しているバズ学習では、効果的な学習指導を進めるための要件を次のようにまとめている。

①実践の基礎としての次の3つの基本仮定の追求を図る。

仮定1：信頼に支えられた人間関係が教育の基盤である（人間関係の重視）

仮定2：学習指導の基本は学習者の学習への動機づけである（動機づけの重視）

仮定3：学習指導では原理の一貫性と目標の統合性を図る必要がある（一貫性・統合性の重視）

②学習指導過程での3つの留意点を踏まえる。

留意点1：参加を企図した授業計画

留意点2：協同による学習指導過程

留意点3：成就を確認する評価活動

③そして、常に研究的実践という構えを求める。

なお、これらの要件は、バズ学習を、他に提唱されている学習指導実践の原理と区別し、際立たせるものではない。むしろ多くの理論と共通していることに意義があるものである。次に具体的にそれぞれの項目を解説する。

1 効果的な学習指導の基盤となる基本仮定

(1) 信頼に支えられた人間関係が教育の基盤である

教師生徒関係、児童生徒相互、さらには教師集団、学校と家庭および地域にまでわたる多様な人間関係が信頼で結ばれているとき、児童生徒にとって最適の学習環境が準備できる。児童生徒は、自身の成長を仲間も教師も家族も地域も願っているという確信がもてたとき、そして自身の活動が相手の支えとなっていると感じ取ることができたとき、もっとも学習に動機づけられる。「人間関係は学習を促進する基盤」となるのである。

また、人の学習は、そのほとんどが社会的関係性の中で行なわれる。そして人との相互作用を通して習得したことがらは、単なる知識に終わらず、道徳性や価値観と有機的に結びつき、社会的存在としての児童生徒の生きる力となるとともに、社会にも有用な意義をもつ。「人間関係は有意義な学習の基盤」ともなるのである。

(2) 学習指導の基本は学習者の学習への動機づけである

学習指導で大切なのは、指導者がどのような活動をするかではなく、学習者がどれだけの学習活動を行ない、どれだけの習得をしたかである。常に学習者が主役であり、指導者は援助者という脇役なのである。指導は「教えて学ばせる」ことではなく「学ぶ手助けをする」ことをいう。学習はあくまで学習者の学習への動機づけが出発点であることを忘れてはならない。児童生徒は常に自己発見、自己統合、自己実現をめざす積極的な存在であるという前提を忘れてはならない。学習活動の生起が不十分な場

合、その原因は児童生徒の意欲のなさにあるのではなく、意欲を削ぐような指導上の不手際にあるのである。

課題のないところに学習は存在しない、というのは、学習への動機づけのための課題の工夫の重要性の指摘である。相互作用の活用は、協同による動機づけの高まりを期待しており、学習到達度に関する情報のフィードバックとしての評価もまた動機づけを高める機能をもつものである。

なお、内発的に動機づけられた学習経験の積み重ねは、興味関心、態度のような積極的な学習の構えを培うことにつながる。それは生涯学習の基礎となるものである。日々の指導における主体的学習経験の意義を見通した教師の援助も大切なのである。

(3) 学習指導では原理の一貫性と目標の統合性を図る必要がある

教師は、学習指導の原理を、場面や学習者によって使い分けるべきではない。使い分けできるのは技法であり、原理の使い分けは学習者の混乱と不信を招く。指導そのものも手応えのないものとなる。バズ学習ではとくに、「差異の強調でなく共通性への着目」を、「排除の論理でなく共存の論理」を、そして「競争ではなく協同的活動」を一貫させることを主張している。

さらに、学習指導目標は、常に統合的視点から設定すべきだと考える。学習者の学習環境づくりのためには「個と集団の成長」を調和的に図ることが効果的である。また「認知的目標と態度的目標の同時達成」は、すべての学習指導領域で可能であるし、統合的にその達成を図ることが双方の目標達成に相乗的に効果的をもたらす。

なお、児童生徒の習得は、教師からの働きかけだけによるものではなく、仲間の児童生徒からの直接、間接の働きかけの意義も大きいし、地域にある潜在カリキュラムの影響もかかわる全体的な過程の結果と考えるべきである。

2 学習指導を進めるにあたっての留意点

3つの基本仮定を実践に移すための、学習指導の設計に際して必要な留意点を次に述べる。

(1) 参加を企図した指導計画

学習への参加は、学習者を学習に強く動機づけ、学習後の満足度を高める条件である。学習指導における学習者の個人の参加には2つの形がある。ひとつは「体の参加」である。算数で操作的な活動を取り入れるなどの工夫は体の参加をねらったものである。体育や実験は体の参加がその過程に頻繁にあるため、児童生徒が好む。もうひとつは「思考の参加」である。興味深い課題を示され、内発的な動機づけが高まり、学習者が既習知識を活性化させ、問題解決に熱心に取り組むようすなどがそれにあたる。一斉指導でも学習者を引きつけることのできる講義の上手な教師は、思考の参加を促す話の運び、話題の準備をしている。

学習者が低年齢児の場合は体の参加が、そして学習者の年齢が進むにしたがい思考の参加が、学習指導の設計にあたっての配慮のポイントとなっていく。学習者の参加については、どのような課題を設定するかがそれを左右する重要な条件である。明確で、その取り組みの過程まで見通すことができ、取り組む意欲のわく魅力的な内容の課題の開発が望まれるのである。

また、学習指導過程での小集団活動の導入による「相互作用への参加」も配慮したい。その際、学習者が全員相互作用に参加できるような仕組み、たとえば個人思考を集団での話し合いに先行させるとか、明確な集団課題を設定するというような方法が有効である。教師との問答や、学級全体への意見発表なども相互作用への参加の機会であるが、そこでは偏りのない参加を図る必要がある。

参加への配慮は、態度的目標では主体性、積極性、課題への興味関心などの形成と強くかかわると考えられる。

(2) 協同による学習指導過程

協同による学習は、学級集団や小集団の成員が共に伸びるという集団目標が徹底されてはじめてなされる。その際、協同は切磋琢磨も含む概念だという的確な理解が必要である。仲間と支え合い伸ばし合う協同事態は、学習者を学習に動機づける適切な条件である。

協同を可能にするために、教師は常に協同の教示も含んだ集団課題を設定する必要がある。また、協同を促す構造をもった課題を開発する必要がある。そして、一貫して協同的な学級集団づくりを図ることが大切となる。このような教師の仕事は容易ではない。しかしその取り組みの過程は、教師としての専門性を鍛える過程ともなる。協同事態は競争事態に比べて学習者の習得をより効果的にするばかりでなく、幅広い同時学習ももたらすという事実を忘れてはならない。

また、協同の技能も教えなくてはいけない。自己志向的な要求を認めてしまうような一貫性のない指導をしないことが要求される。日常的に相互作用の仕方を訓練していく工夫が必要となる。

協同への配慮は、態度的目標では、社会性や相互作用技能だけでなく、仲間の学習に貢献する経験を通しての自己有用感の形成などにかかわるものである。

(3) 成就を確認する評価活動

個として参加し、仲間との協同を通して学習した結果、学習者一人ひとりが自身の成長の手応えを十分に感じ取るとは、次の積極的な学習につながる条件である。成就感を経験させるための工夫は、学習指導の過程で一貫してなされるべきであるが、とりわけ評価のステップでその配慮が要求される。

学習内容の習得をそのまま問う事後テストの結果を、同一内容であらかじめ行なった事前テストの結果と比較し、進歩量を明らかに示すとか、教科指導領域の目標だけでなく、同時学習された幅広い習得に気づかせるための多面的な評価を行なうなどが、成就の体験を導く工夫となるだろう。

また、小集団を活用し、集団課題を設定した場合は、それに対応した評価を忘れてはならない。集団の成就に関する評価情報のフィードバックは、集団づくりへの有用な働きかけとなるからである。同時に集団成員としての個人の責任を個々の成員に自覚させる機会となるからである。

評価の手続きとしては自己評価、相互評価を多く用いることが望ましい。バズ・単元見通し学習のように、学習内容、学習計画があらかじめ明示されているような工夫は、自己評価、相互評価を的確に進めるための条件づくりともなっている。学習指導過程と評価は一体化して捉える必要がある。

成就への配慮は、態度的目標では、自尊心、自己効力感などを高め、集団への積極的な態度形成をすることにつながる。また、自己評価能力の形成ともかかわるものである。

3 実践者のとるべき構え

バズ学習はグループ・ダイナミックスの研究方法であるアクション・リサーチを多く採り入れてきた。実践的意義をもつ学習指導の原理追求への接近方法としてそれは有効なものであり、多くの成果を生みだしてきた。実践者と研究者、実践活動と実証研究の連携が学習指導の改善には不可欠である。バズ学習がとってきたこの研究方法は、日常の実践においても応用されることが望ましい。指導の計画に際しては先行研究や経験に基づく仮説設定をし、指導後には目標に即した評価を行なう。得られた資料を客観的に分析検討し、次の改善を図っていく。そのような一つひとつの事例を積み重ね、そこに原理を見いだしていく。そしてそのようにして先に掲げた基本仮説の検証を図っていくのである。常に研究のフィールドにいる実践者の強みを生かす方法といえよう。

そこでは、教師の主体的な意思決定が常に必要となる。また、学習指導の効果をフィールドバックする評価手続きは、学習指導を設計する教師の責任を明らかにする。研究的実践は教師文化の変革をもたらすものである。

実践は研究的態度をもって進めることが必要である。それにより、新しい教育課題にも前向きに取り組む構えができようし、教師同士の連携も可能となる。そのような教師および教師集団の姿は子どもにとって望ましいモデルとして機能し、期せずして有意義な同時学習をもたらすことになるだろう。

参考図書

- 有元・加藤・望月・杉江編 1997 学校は変わるか：コーポラティブな人間関係を基盤とした授業改善からの接近 日本教育総合研究所
- 市川千秋 1987 自由バズを取り入れた授業の進め方 明治図書
- ジョンソン他(杉江・石田・伊藤・伊藤訳) 1998 学習の輪：アメリカの協同学習入門 二瓶社
- 丸山正克 1996 仲間との絆を育てるバズ学習のすすめ (株)みらい
- 塩田芳久 1989 授業活性化の「バズ学習」入門 明治図書
- 杉江修治 1999 学習指導改善の教育心理学 揺籃社
- 杉江修治 1999 バズ学習の研究 風間書房

第31回全国バズ学習研究大会役員一覧

○ 第31回全国バズ学習研究大会

会 長	木 村 幸 夫	(豊島区立道和中学校校長)
実行委員長	寺 井 正 輝	(春日井市立柏原小学校校長)
運営委員	望 月 和三郎	(東京都バズ学習研究会事務局長)
同	杉 江 修 治	(中京大学教授・全国バズ学習研究会常任委員)
同	石 田 裕 久	(南山大学教授・全国バズ学習研究会常任委員)
事務局長	堀 場 正 美	(春日井市立不二小学校校長)

○ 全国バズ学習研究会

会 長	寺 井 正 輝	(春日井市立柏原小学校校長)
研究者代表	梶 田 正 巳	(名古屋大学教育学部部長)
事 務 局	堀 場 正 美	(春日井市立不二小学校校長)

○ 全体会・分科会の助言者、司会者、記録者は、全体会、各分科会の扉に記載

第31回全国バズ学習研究大会要項
ともに学び、ともに育つ、総合的な学習の展開
—— 個を育てるバズ学習・協同学習 ——

編 者 第31回全国バズ学習研究大会準備委員会

発行日 2000年1月27日

発 行

印刷所
